

第三篇 生物進化論と社会哲学

第七章

7-1 人口論問題序論

ここで必ず起こる問題がある。つまり、人口論である。男女の自由な恋愛を放任すれば、人口の増加をどうするべきかというマルサスの人口論¹である。我々は、ここで社会主義時代における社会単位の生存競争という食物競争を説く機会に到達した。

もし個人主義の経済学者ミル²が解釈したように、マルサスの人口論は社会の行く手に横わっている鉄壁という意味ではなく、現在の社会の下に敷かれた網であると意味ならば、これはある程度まで事実である。なぜならば、彼らはこの社会を解釈するのに個人の集合した関係もしくは状態と解する個人主義者だからである。つまり、社会を社会それ自身がそれ自身の目的のために進化し、その過程として幾多の現象を示すと理解せず、貧民階級が貧困である理由を貧民個人の道徳的責任と考え、「君たちが子を産みすぎたのだから、自業自得だ」と言うにすぎないのである。露骨に言えば、資本家階級がみだらな享楽にふけったり、気ままに遊びにふけることは金持ち個人の権利であり、貧乏人の貧しさは貧困に伴う生殖行為を抑制する個人的義務を忘れるためだと言うにすぎないのである。我々は今日の労働者階級が他の気高くみやびな精神的快樂を持たないため、また幼少から肉欲を挑発される環境に置かれたため、多くは生殖行為を娯楽として取り扱うことを否定しない。また、その行為の累積は、ラマルク³の用不用説があるので、生殖欲を非常に高ぶらせるものであることを否定するものではない。しかしながら、不幸な環境によって不幸にされた彼らに、貧困の一切の責任を負担させるならば、我々は同じく不幸な環境によって不幸にされた資本家階級ののだらしない⁴生活を見逃している⁵という寛大さをやめなければならぬ。略奪はだらしない生活をする権利を作り、貧困は生物として不可欠な義務を消滅させると言う——これが人の面を備えた者の口にすべきことだろうか。統計は明らかに示している。つまり、今日のように増加した人口があるために、増加した機械を運転し、増加した新発見地を開墾し、それによって今日のように増加した富の資本家階級を作り上げたの

¹ イギリスの経済学者。『人口論』を発表して大きな衝撃を与えた。『人口論』は、人口は幾何級数的に（等比数列の割合で）増えるが、食糧は算術級数的に（等差数列の割合で）しか増えないので、貧困は一種の自然現象として生じてくと論じた。

² イギリスの思想家、経済学者。ベンサム功利主義を量的なものから質的なものへ修正した。『自由論』、『代議制統治論』などの著書を著した点でも名高い。

³ フランスの博物学者。ダーウィンの進化論が出るまでは、ラマルクの用不用説が有力だったと言われる。

⁴ 原文では「娼荒」だが、意味がわからないので、文脈に従って訳した。

⁵ 原文では「寛過」だが、「看過」とほぼ同じ意味であろう。よって、言葉を改めた。

であると。貧民の生殖欲が激しいからこそ、今日の経済的貴族は維持されている。僧侶の身⁶でありながら、人の寝床⁷にまで口出しするとは何事であるか。

しかしながら、我々は理論を語る者が恥ずべき感情論に陥ることを避けなければならない。彼マルサスのような個人主義時代の昔の人に対し、こうした態度でいきり立ち、のしっている社会主義者と称する者もいるが、それもまた等しく個人主義で貧民階級のそばで人口論を解釈しているものにとどまっておき、社会主義は自ずから論拠を異にする。いや、単にマルサスと等しく個人主義に足を立て、あの人口論を考えたところで、価値もなくひどい独断論にすぎないのだ。

7—2 マルサスの独断はどこが原因か

マルサスの人口論は独断の一点から演繹を始め、その独断を先入観にして独断に適合するように統計を解釈し、その帰納からいかにも科学的研究であるかのような眺めで再び出発点の独断に帰ってくる。人口論という蜃気楼⁸は、まさに「等差数列」⁹と「等比数列」という二つの言葉から夢が描かれる。そしてこれ全部がまさしく根拠のない独断である。つまりマルサスは、食物は等差数列すなわち一、二、三、四¹⁰の割合で増加するのに、人口は二、四、八、十六¹¹の速度で増加する等比数列であるため、貧困は人生において永遠に伴う運命なのだと独断的に述べた——そしてこの夢よりも驚くべき独断が人口論の全部を組織し、今の学者階級がこの独断に疑いをはさまずに彼を権威として奉じているとは全く理解できないことである。彼はもちろん統計を掲げて論じている。しかしながら彼の平凡な脳の中には、既に等差数列と等比数列という独断が統計からの帰納よりも先に凝結して存在しているため、統計を処理する上で常にこの独断が君臨している。例を挙げれば、彼が二十五年ごとに人口が二倍になるが、食物の増加ははるかに少ないと帰結するにあたり、全く比較できない別種のを比較したことなどはこれである。彼が根拠とする「二十五年ごとに人口が二倍に増加する」という統計の計算は、アメリカの未開時代のことである。当時のアメリカにおいては人口の増加とともに、食物はそれと同じ等比数列の割合で増加していたという事実が、自然現象として存在したものであることを顧みていないのだ。それなのに、彼はアメリカにおける等比数列的に増加する人口を同じように等比数列的に増加している食物に対照させず、アメリカの人口だけを抱いて空中を飛行し、ヨーロッパの食物の上に持ってくる。そして、「見よ、人口は等比数列の割合で増加するものなのに、食物は等差数列の割合で増加するではないか」と、全く別種の統計を指したのである。こう

6 「僧侶の身」というのは、禁欲を説く様を宗教家に見立ててのものであろう。

7 性生活、つまり生殖活動のこと。

8 原文では「空中楼閣」となっている。「空中楼閣」とは、蜃気楼のこと。根拠のないものの例え。

9 「等差数列」、「等比数列」は、原文では「算術級数」、「幾何級数」となっている。今は算術級数などの呼称は使わないので、本文のように直す。以下も同じである。ちなみに、等差数列とは $a_n = a + (n-1)d$ (a は初項、 d は公差) という形で数が増えていくもので、等比数列とは $a_n = a \cdot r^{n-1}$ (a は初項、 r は公比) という形で数が増えていくものである。等比数列のほうが等差数列よりも数の増え方が圧倒的に大きい。

10 数学的に説明すると、この数列は初項1、公差1の等差数列と説明される。

11 数学的に説明すると、この数列は初項2、公比2の等比数列と説明される。

した統計の取り扱いによって少々帰納されたかのような痕跡があるとしても、その根本点である等差数列と等比数列にどれほどの力を加えるだろうか。そもそも、食物も人口も決して等差数列によって増加するものではない。また等比数列によって増加するものでもない。人類に今日食物として取られている動植物も生物種族であり、それを食物として取っている人類も生物種族の一つである。——今の学者という者たちは己を恥じよ！ 一粒から一万倍に増えるとはいかなくとも、一粒から出た米の茎から等差数列の割合で二粒に増加するしかない穂の稲があるだろうか。ネズミは等比数列の割合で産まれるのだとされる。しかしながら、それは単に産まれる割合というだけのものにすぎず、そのうちの大部分が物質的危難——あるネズミは猫などの、あるネズミはペスト菌などの他の生物種族との生存競争によって劣敗者となり、第二の等比数列的增加をもたらす子を産む前に死んでしまう。そのため、決して増加する時においても等比数列が維持されるわけではない。マルサスに手を合わせ、礼拝している今の経済学者の神棚には、ネズミが一年に一匹の母から八千匹に殖加する割合を等比数列の山を作っているのではないか。マルサスは言うまでもなく平凡以下の人である。むしろ人類の食物とされる下等な生物種族は、これらを食物とする人類に比べて数十倍の子を産み、数百倍の果実を結び、数万倍の卵を産む。それ故、もし平凡な人として間違いをするならば、逆に「食物は等比数列の割合で増加し、人口は等差数列の割合で増加する」という独断を示しても、転倒した結論を導くことはないだろう。もちろん、マルサスの時代には人口増加を国家競争のために過度に奨励していたマーカントイル・システム¹²（重商主義）への反動があったことは事実である。また、次第に悲惨な現象を呈しつつ始まっていたイギリスの産業革命のせいで、冷静な判断を保てなかったことも事実である。また、産業革命の初期であり、かつ経済的土豪の時代であったため、あたかも幕末に至って次第に諸侯の略奪の跡を発見したように、あの当時に何人が出てもカール・マルクスとなり得なかったのは、社会進化の程度としてももちろんやむを得ない事実である。しかしながら、等差数列と等比数列といった、野蛮人よりも数の観念の不明確なものを使うのは、まさに劣等な頭脳であると言う他ないが、それ以後百年の長い間、無数の学者によって継承され、一種の経典ようになった。権力階級に採用されてからは残忍で道理のない抑圧、虐げの方便として下層階級に臨んでくるようになった。何とも人類の精神も、怪しむべきものであることよ。しかも、今なおマルサスの時代から等比数列の勢いで増加してきた靈知¹³を持った金井博士などは次のように言う。「地球全体を開墾してみても、人類は三階、五階¹⁴の家を建て、空中にまで増加するから、人口の増加は避けられない」と。人類の靈知も極まったものだ。

¹² 原文では「メルカントイル・システム」となっているが、“Mercantile system”のこらしい。当時は Mercantile をドイツ語で読んでいたのかもしれない。

¹³ 原文では「靈智」だが、靈知でも同じなので、そちらに改めた。「靈知」とは、靈妙な知恵のことで、「靈妙」とは尊く不可思議なことを表す。

¹⁴ どうして「三階、五階」としてあって四階を挙げないのかわからない。後に続く北の批判の中では「三階、四階」となっており、明らかに不整合をきたしている。北が引用を誤ったのだろうか？ とりあえずそのままにしておく。

しかしながら、いかなる下等な学者に対してといえども、軽蔑を送って過ぎ去るべきではない。彼ら下等な学者は真理を語るというよりも、単に当時の大勢の後ろに¹⁵付いて、大勢となるものを反響させているものなのである。大勢であるならば、いかに価値のないものであっても、十分に迷いを打ち払ってしまうのだ。そして下等ではない貴い金井博士が、今もなおマルサスの人口論を社会主義に対抗させて最後の砦としているのを見れば、人口論が完全に大勢であることは見過ごすことができない。彼は言う。「飢餓を余儀なくされている下層階級がなくなるならば、社会全体を挙げて人口の増加を招来し、社会全体の餓死をもたらす論理ではないか。」と。これはマルサスの人口論をミルの解釈のように、現代社会の下に敷かれた網であるとの意味に解さず、社会進化の前面に立ちはだかる鉄壁と考えるものである。社会主義の根拠は、まさに社会進化論に存在するから、社会主義は社会進化の将来について厳粛な知識を必要とする。故に、もし社会哲学の上に経済学を築いて社会主義に対抗するならば、社会主義の非難者として堂々とした者だと言える。しかし、子供でさえも敢えて言わない「三階、四階の家などが北極から南極まで建つ」といったことを想像し、それを等比数列の割合だとするマルサスを祭るなどの事態に至っては、ただ醜いと言う他ない。こうした学者の多くは、自らを社会主義者と区別しようとして、愛国者を自任し、学者は千年後の後世を見抜いている必要があると自任している。そのために、地球が冷却した後の大日本帝国をどうすべきかという大々的問題とともに、この千年後の人口論は道ばたで餓死した人を除いて必ず論議しなければならない緊急問題であり、社会主義者は常にこうした学者の前に講釈を要求されている。我々は公言する。こうした学者に対する最もよい答弁は、軽蔑を表示する沈黙であると。経済学は社会の物質的基礎を論じるものであるから、社会学の知識を必要とし、そして社会学は人類という一生物社会の生存進化の理法を研究するものであるから、全ての生物種族の生存進化を研究する生物学の一章である。したがって、経済学者が今日非常に狭い殻の中に閉じこもり、盲動的に研究している人口論などは、全く生物学の知識をもって臨んでいないものである。しかしながら今の経済学者という者は、生物学が誕生する以前、社会学が誕生する以前の酒粕をあらかじめ先入観として頭脳を組織しているため、たとえ彼らに向かって社会学によって新社会を論じ、生物学によって新社会の人口を説こうとも、効果がないことにおいては石地蔵と語るようなものである。そうではないのだ！ 彼らは、今日経済学の対象としている食物の無限ということについて語り、アメリカの平野だけを開墾しても、なお三十五億人を養うことができるとか、海と名付けられた三分の二の牧場が地球にはあると言おうとも、全地球を開墾した上、なおその表面の全てに三階、五階の家が建つと言うほどに豊富な詩人的想像力を持っている。そういう彼らのことであるから、必ず千年後を見抜く先見の明によって、百億、千億に増加したらどうするかと窮迫するのだろう。また、もし将来の食物は化学的調合によって得られると言うのなら、その丸薬一服を見せてくれない限り、経験的科学的ではないと答えることにある。我々は礼儀にこだわることができない。第五編

¹⁵ 原文では「後へに」となっている。「後へ」と書いて、「しりえ」と読む。意味は「後ろ」という意味である。

の『生物進化論と社会哲学』は、哀れむべき頭蓋骨が陳列された今の学者階級に向かって語っているものでないことを告示しておく。

7—3 食糧問題について

マルサスの人口論は人口対食物の問題であるから、我々が生物学によって「人口」を論究するよりも、まず単に経済学の今の範囲内において「食物」を考え、マルサス論を社会進化の将来に立ちほだかる鉄壁と解釈して、恐怖することは理由のないことだと信じている。経済学者は食物の進化というものを知らないのだろうか。まさに、彼らは食物の種類及び食物の生産方法が社会の進化とともに進化してきており、また進化していこうという事を知らない——今日の米、麦、魚、鳥などの食物の種類及び今日の原始的段階の者と大差のない煮る、焼くという生物の生産方法¹⁶から進化するだろうということを知らない——ため、等比数列という独断で形作られた頭脳によって直ちに人口の増加を推論するのだ。そして、社会全員の餓死か、そうでなければ社会主義の夢想だという笑うべきジレンマ¹⁷を作り出すのである。もし今の経済学者が進化論を否定せず、社会を今のままで停滞するものもしくは循環するものと考えないのならば、我々はまず首を回して、今日の食物の種類と生産方法が今日にまで進化してきた経済的進化を顧みる必要がある。それが未だ微々たるものであることは言うまでもない。しかしながら、社会の進化が漁業、狩猟時代に入り、牧畜時代に入り、農業時代に入るに従い、食物の種類がそれぞれに進化したことは注意すべき事実である。栄えある農学博士新渡戸稲造氏¹⁸が、『農業本論』においてフランス人フォアサック氏¹⁹の意見であるとして引用している所によると、農業と牧畜とでは同じ面積で養える人口に二十倍から三十倍の差があり、さらに牧畜と漁業とでは同じ面積で養える人口におよそ二十倍の差がある²⁰と言う。ゼテガスト²¹の意見としては、農業では五反²²から一町歩で一人を支えることができるが、牧畜では五十町歩から七十町歩でようやく一人を養えると言う。そして牧畜が多く土地を必要とする例を挙げ、ロシアでは男子一

16 「煮る、焼くという生物の生産方法」というのはよくわかりにくい表現であるが、北は調理法も「生産方法」の一つと解釈する（後述参照）。

17 原文では「ヂレマ」だが、「ジレンマ」の誤りであろう。

18 新渡戸は札幌農学校の出身で、国際連盟事務局次長として活躍した。『武士道』を書いたことでも名高い。一高の校長も務めたが、大逆事件の判決について批判した徳富蘆花の講演が一高で主催されたのは、彼の校長時代である。『農業本論』も彼の主著である。

19 フランスの農学者なのだろうが、詳細は不明。

20 原文では「農業と牧畜とは同面積を以て養ふべき人口の差は二十倍乃至三十倍にして更に其の牧畜と農業とは同じ面積を以て養ふべき人口の差亦凡そ二十倍なり」となっている。新渡戸の原文では、「農と牧畜同面積を以て養ふべき人口の差二十乃至三十倍、牧畜と漁業とは同面積を以て養うべき人口の差、凡そ二十倍なり」となっている（『農業本論』明治三一年版一七五頁）。北の引用では、後半部分も牧畜と農業の比較になっているが、正しくは牧畜と漁業の比較である。本文では、新渡戸の原文に従って修正した。

21 原文では、「ゼオガマスト」となっているが、引用に誤りがある。正しくは、「ゼテガスト (Settegest)」。農学者と思われるが、詳細は不明。

22 「反」、「町歩 (町でも同じ)」は土地面積の単位。昔は六尺三寸 (約一九〇cm) 四方を一步とし、三十歩＝一畝、十畝＝一反、十反＝一町としていた (ただし、これは太閤検地後)。一反 (段) あたりで約九九一・七m²の面積がある。よって、一町あたりでは九九一七m² (およそ一ヘクタール) である。

人を養うのに八十町歩から百町歩の放牧地を必要とし、オーストラリアのクインズランド²³では羊一頭ごと一平方マイル²⁴を必要とすると言っている。食物の種類が野生の魚、鳥という純粋に原始的な生産物を主要なものとしていた漁業、狩猟時代には、原始的食物が存在する地球の部分以外を生産に用いることができなかつたので、人類が少ないのと同時に、それが食物が欠乏していた理由であった。社会が進化すると少し人類の知能が生産上に現れ、原始的に存在する牛、羊を人為的に繁殖させるようになった。そうすると、生産に用いられる地球の部分は人の知恵によって拡大され、人口の増加とともに食物の増加をもたらした。さらに、社会が進化して食物の種類が多くなり、米、麦が栽培されるようになると、植物は動物よりも繁殖する生物種族なので、生産に用いられる地球の部分はさらに大いに拡大され、人口の増加とともに食物の増加をもたらした。新渡戸氏の論説はこれを示すものではないのか。漁業、狩猟時代に「魚、鳥に関するマルサス論」²⁵は出ず、牧畜時代に「牛、羊に関するマルサス論」は出なかつた。それなのに、どうして農業時代の食物に進化した時だけに「米、麦に関するマルサス論」が出て、その迷信を信じる者が入り乱れるというのか。

社会は食物の進化とともに、さらに食物の生産方法を進化させる。最初は原始的に放任していたものが、次第に人の知恵によって食物となる生物種族（つまり牧畜時代ならば牛羊、農業時代ならば米、麦）を繁殖させることが生産方法の進化である。農業で例を挙げると、マルサスがアメリカで得た統計である「人口は二十五年ごとに二倍になる」というのと正比例をなすように、デルブリュック²⁶はドイツの農学の発達によって百年間に四倍の生産を得たと言う。マルサス教徒は、「耕地には一定の限度がある」と言う理屈で凝り固まっているが、農学者は——陸海軍が外国に領地を奪取して版図を拡大するように——科学を用いて国内の土地を侵略し、三、四倍にも拡大させた。つまり、人類の食物の種類が農業時代の米、麦に進化している間、米、麦の生産方法もまた等しく進化したのである。しかしながら、我々がここで食物の生産方法という形で用いている「生産」の文字は、経済学上の学術用語として用いるものである。つまり「生産」という言葉は、食物となる生物種族を繁殖させる方法が生産方法の一つであるとともに、その生物種族を人類の口にまで持ってくる間にさらに人の知恵を加える経済的活動を意味する。言い換えれば、羊毛を取るために知恵を使って羊を繁殖させることが生産行為であるとともに、羊毛に知恵を加えて織物を作ることもまた等しく生産行為である。それと同じく、家を建てるために知恵を使って松や柏の木を繁殖させることが生産行為であるとともに、松や柏の木に知恵を加えて切断することもまた等しく生産行為である。そして、知恵を使って食物となる生物種族を繁殖させる農業、牧畜が生産行為であるとともに、さらにその動植物に知恵を加える「煮る」、「焼く」という動作は経済学上の生産行為である。——我々は、この意味におけ

²³ オーストラリアの北東部の州のこと。

²⁴ 原文では「一方哩」だが、一平方マイルのことであろう。約二・五八平方キロメートルに相当する。

²⁵ 原文では「魚鳥のマルサス」などとなっているが、これでは意味がわからなくなるので、語句を補った。

²⁶ ドイツの経済学者であろうか？Delbrückか？

る食物の生産方法が進化するものだということを忘れた経済学者を怪しむ。一切の生産が原始的生産から工業的生産に進化するの経済学上の事実である。つまり、社会の原始時代においては原始的存在のまま衣食住の用に供されていたものが、社会の進化とともに知恵によって原始的存在を変形もしくは変質させた後、衣食住に用いるということである。それなのに、食物だけは未だ原始的存在のままのものを用いており、原始人と大差がないため、今日我々は摂取している食物の大部分を消化させることができず、体外に排泄する。つまり、ただわずかにものを煮炊きして食べることを知っているという点で、原始人よりは食物の工業的生産をしていると言えるが、それも麦からパンを焼く、米を飯として炊く、魚、鳥、獣の肉を煮るもしくはあぶるという方法を知るだけである。衣服、住居を作るような正確な知識によらず、ほとんど完全に本能の好みに従って、ただ舌に合う方法をとっているにすぎないのだ。原始的な住居は木の上に作り、山の中腹に穴を掘ったものであった。けれど、そうして原始的に存在するままに木や石を用いていたことから、つたない工業的生産行為を加えて小屋を作ることに進み、さらに今日のように、大都会に五階、十階の工業的生産行為を行うようになった。そのため今日の経済学者は、「住居に関するマルサス論」を展開して、「皆の者、生殖を慎め。世界の木の上と山の中腹には限界があり、巢を作って暮らしたり、穴を掘ったりして暮らせなくなる²⁷。人類は平原の洪水で溺死するだろう（禹が治水をするまでは、中国においても皆巢を作って暮らしたり、穴を掘って暮らしたりしていたという。）」と言わないではないか。衣服の原始的なものは、一平方マイルの牧場を必要とする一匹の羊からただ一着²⁸の衣を得られるだけであった。けれど、それが今日では牧畜時代のような原始的存在のままの衣服を捨て去り、羊毛だけを毎年刈り取る紡績という工業的生産をするようになった。それにより、現在の経済学者はまた「衣服に関するマルサス論」を展開して、「君たち、生殖を抑制せよ。世界の牧場には限界があるから君たちは凍死するだろう。」と説かないではないか。——住居の生産方法の進化によって住居がないことによる溺死は回避され、衣服の生産方法の進化によって衣服がないことによる凍死は回避された。それなのに、どうして食物だけの生産方法だけが現在のような原始的生産にとどまり、進化しないものかと考え、「食物に関するマルサス論」だけがはびこり、食糧不足による餓死を叫んでいるのか。我々が今日生の穀物を噛み、生肉を食べていた原人時代から今日のを煮炊きして食べる状態に進んだのは、火と包丁のわずかな工業的生産行為が食物の上に加えられたからである。もしこの工業的生産行為がわずかなもので、しかも盲動的なものにすぎないとしても、そのために同じ量の食物を取りながら、生でものを食べる野蛮人よりもそれだけ多くのものを消化しているならば、口の中から送られて単に醜い物質として大部分が排泄される（笑い話だ、今のドイツ皇帝もこの進化を経た生物であることを免れないのだから。）今日の原始的食物が、科学者の分析によって観察され

²⁷ 『日本書紀』の神武天皇紀に、神武天皇が詔の中で、「民心は素朴である。巢に棲み穴に棲む」と述べている一節がある。

²⁸ 原文では「一領」となっているが、こなれた表現に変えた。

る栄養分を全部消化、吸収できる工業的生産行為が加わることを想像せよ。今日直ちに食物とされているものは単なる原料とされるようになり、今の数十、数百倍もの人口をも優に維持できることを想像せよ。繰り返して言おう。我々は下等な頭脳の学者階級に向かって語っているのではない。我々はただ、今日まで進化してきた法則がさらに将来の進化に至る法則であるということと、全ての生産は原始的生産から工業的生産に進むという経済学の原則によって、今日の原始的生産のままの食物も同じように工業的生産時代に入ることとを確信するのである。そして、この工業的食物時代が到来することを確信するからこそ、今日科学者が折々実験室の窓を開いて、「将来人類が化学的調合によって食物を得る時が来るだろう」と告げる予言にお辞儀をして耳を傾けるのである。——つまり、人類の生存進化を維持するのに必要な栄養物を、胃腸の工場で原始的生物種族から生産することから進化し、蒸気と電気を持つ大きな胃腸によって生産する工業的消化時代となり、さらに栄養物それ自身を原始的生物種族に求めず、人為的生物種族から得る時が来るだろうということである。

詩人は天国を指し、科学者は天国に至るはじごを作る。科学が一元論となり、無機物、有機物の区別がなくなり、あらゆるもの全てが生物種族であるとの実験による結論は、人類の手によって従来生きていないものとされていた無機物から有機物を作るようになる。たとえば、一八五四年に化学者ベルテロ²⁹はグリセリンと酸から天然の物質と全く異ならない脂肪油類を合成し、さらに簡単に炭化水素³⁰からこれを合成することができたという。そして今日糖分もまた化学者の実験室内において合成され、残す所はタンパク質だけであるという。甚だしい例としては——未だ正確な報道はされていないが——、ある学者は化学室において完全に一個の生物を作ったと言う話がある。そしてこれは、いわゆる無機物を有機物が食い、植物を動物が食い、さらにその動植物を人類が食うというような重複と残忍さを取り払い、人類が直ちに大本の無機物、有機物（実は無差別な元素の集まりである³¹）に食物を求めるものである。推論の走る所は驚くほど遠いものであるが、「類神人」が消滅してからやって来る「神類」の時代を想像するならば、それほど哲学的思弁のものでもない（後に説く社会進化の理想を見よ）。マルサスはまさに百年前の昔の人であって、新派経済学者の嘲笑する旧派の経済学者であるだけでなく、ダーウィンの『種の起源』が出版される五十年も前の者である。我々はこうした平凡な昔の人の説を頑固に信じて経済学の世界でノアの洪水³²の到来を説くよりも、過去の進化の跡を顧みて、科学者の慎重な実験に従いたいと思う者である。

7—4 競争の意味の誤解

²⁹ 十九世紀のフランスの化学者、マルセリン・ベルテロのこと。原文では、「ベテルロー」となっているが、ベルテロの誤り。

³⁰ 炭素と水素のみからなる化合物の総称。ベンゼン、ナフタレンなどが典型。

³¹ 原文では「実は無差別なる原々素」となっているが、意味がわかりにくい。よって意識した。

³² 旧約聖書の創世記にある洪水の話。人類の墮落に怒った神が引き起こしたと語られている。

我々はここで「人口」を生物学に基づいて説かなければならない。これは、我々が種族対種族の生存競争と言っている食物競争の生物学上における地位を決定するためである。

ダーウィン自身の自白によれば、その生存競争説はマルサスの人口論から考えついたものであるというから、現在の状態は生物学上マルサスの説を確かめるかのようである。しかしながら、これはまさしくダーウィンのひどい不注意によるもので、これがあるために彼の『種の起源』は単に、「生物種族は天地創造説のように神の作ったものではなく、進化によって成立したものである」という事実の発見以上に何らの理論を提供できなかったのである。マルサスがいわゆる等比数列の割合で生まれる人が等差数列の割合で増加する食物の上で競争していると言ったことから、ダーウィンはそれを全ての生物種族の上に拡充させ、それを生存競争説の理由としたのだ³³。マルサスが十八世紀末の個人主義の空気によって養われ、人口増加の意義の深い自然法則を理解できなかったように、ダーウィンは社会主義の科学的基礎となるはずの生物進化の事実を理解しながら、なお個人主義の余波に漂わされたため、生物進化論において占めるはずの食物競争の地位について残念な過失に陥った。つまり彼にとっては、生存競争と同じ食物の上に重複する同種族間の食物への個々の要求が衝突して、その競争の優勝者が生存するということにすぎない。

実に惜しむべきことである。もしダーウィンが当時既にカール・マルクスが出たほどに進んでいた社会主義の風潮を取り入れたならば——少なくとも個人主義の独断論から脱却できたならば、生存競争を同種族個々の競争と理解するような過失はなかっただろう。この点において最も正当な見解を持っていた者は彼と同時代のハックスレー³⁴である。彼は同種族間の生存競争は間接的で無意識的なものであるが、異種族間つまり食物にするものと食物にされるものと間での生存競争は直接的で意識的であることを明らかにした。言うまでもなく、ハックスレーの「間接的で無意識的な同種族間の生存競争」とは狭義の食物競争のことである。それは、我々の用いた広義の生存競争、つまり継続された命において理想を実現しようとする最も直接にして意識的な雌雄競争を除外したものである。また、食物競争を異種族間の生存競争と言うのも、我々のように明らかに競争の単位を決定してのことではないの言うまでもない。なぜならば、異種族間の生存競争である食物競争が異種族間において直接的で意識的であるとともに、同じ食物である生物種族の上に同種族がある単位で（つまり遊牧時代には村落の単位で、現代では国家もしくは階級の単位で、飢饉のような場合には純粋な家族もしくは個人の単位で）直接的で意識的な生存競争をするからである。しかしながら同種族間で直接的かつ意識的に食物競争をすと言っても、その競争は食物となる異種族に対して直接的かつ意識的に生存競争の優勝者となろうとするために同族を排除するというだけのことにすぎない。同種族を排除する必要がないほどに食物となる異種族が豊富な所（人類で例えるならば、堯、舜の原人時代などがそれである）、もしくは同種族を排除する努力を共同に転じ、団結した大きな単位で他の生物種族の上に

³³ つまり、絶対的に食糧が不足するため、種族内で淘汰が起こるという理屈を考えたということ。

³⁴ イギリスの動物学者。軍医などを務め、海産動物などの研究で著名になり、ダーウィンの進化論を擁護した。

完全な優勝者として君臨し、異種族を豊富にした所（例えば社会主義の理想が実現された時代など）では、直接的で意識的な食物競争は種族対種族のものである。もし個人主義の立場から生物進化の事実を解釈したダーウィンのように、生存競争とはマルサスの人口論が全ての生物種族に行われることだと解釈するならば——つまり、同種族間の個々の生物が個々の生物に対する生存競争と解釈するならば——、あの虫類の保護色などの最も理解しやすい事実をどうやって説明されるのか。この保護色は、虫類を捕まえて食物とする鳥類という他種族の攻撃から生存を保持するためであり、それは毒があることを表示する色や木の葉、花卉に似せた色にすることで、それらの保護色を持つ同種族の他の生物を恐怖させ、あるいは欺いて食物を奪う意味を持たないことは誰もが知っている。こう虫類の保護色などの例を示せば、生存競争の相手が明らかに他種族であることがわかるのだが、皮相的な見解を抱く者の目の前で犬がしばしば互いに争い、猫が噛み合うものだから、肉食獣などは個々の生物が他の個々に対して各々競争の相手となっているかのように速断するのだ³⁵。しかしながら、彼ら肉食獣は単に共同しない非社会的な生物であるというだけのことであって、肉食獣の牙と爪は決して同種族の肉を目的として磨かれたものではない。食物となる肉である他種族に対し、生存競争の優勝者となろうするためである³⁶。同種族間の個々の生物が同種族の個々を相手として存在するならば、彼らの食物となる他種族が乏しくなくて欲望が重複しない時であっても、直接的かつ意識的に食物競争をして、同種族の肉そのものが競争の勝利者の爪と牙にかからなければならない。そして狼のような肉食獣が、食物となる他種族の豊富なシベリアの広野においては数千頭の群れをなして存在するといった生物界の現象は、意味のわからないものとして持てあます他ない。数千頭の狼の肉は決して数千頭の狼の食事ではないのだ。そうではないのだ！ 今のダーウィンを偶像として崇拜する生物進化論者が今も個人主義の生存競争を維持したいと思うのならば、我々はまさに問わなければならない。アメーバはアメーバを食べて生存しているのだろうか。芽生生物は芽生生物を食べてサンゴを作っているのだろうか。牛は牛を食べ、馬は馬を食べ、ツバメはツバメを、ハトはハトを、チョウはチョウを食べて生存競争をしているのだろうか。稲は稲を食べ、芋は芋を食べ、松の木は松の木を食べて生存競争をしているのだろうか。

我々は、ここで生存競争の優者、適者、強者の意義を繰り返して説かなければならない。つまり、いわゆる生存競争の優勝者とは、他種族との生存競争において同族の中で最も優れた点を持つ者がその優れた点を維持して生存するということである。生存競争の相手というものとは別の意義を持つものである。繰り返して言えば、同族の中の優者、適者、強者は同族の中の劣った者、不適者、弱者を相手としているのではなく、その優劣とか、適不適とか、強弱とかいうのは、生存競争の相手である他種族に対してのことである。その他種族に対して優者となり、適者となり、強者となる同族の者が生き残るということが生

³⁵ 要するに、「ライオンや虎は同種族間で争い合っているのだ」と速断するということ。

³⁶ 要するに、「食物となる動物などにとって、生存競争を勝ち抜こうとしている」ということ。

生存競争の結果なのだ。例えば、ここで各々が一軍団を率いて戦うとせよ。戦争の結果として戦争後に残るものは、軍団中の優者、適者、強者であるが、戦争の相手はもちろん敵の軍団であり³⁷、自己の軍団内の各構成員が各構成員に対する戦闘をして優者、適者、強者の意義が決定されるのではない。生存競争の意義はそれと同じである。馬の進化した四つの足は同族を蹴り合うためにあるのではなく、他種族である競争者から逃げられた優者がいた結果である。猫、虎などのネコ科の犬歯は、同族間で噛み合うためにあるのではなく、他種族である競争者に打ち勝てた強者がいた結果である。毛虫やハリネズミが針を皮膚に持っているのは、同族間で刺し合うためにあるのではない。イタチが逃げる時に臭い尻を放つのは、他種族である競争者を撃退できた適者がいた結果である。生存競争の結果と相手の違いはこれほどわかりやすい道理であるにもかかわらず、同族がある特殊な場合に直接的かつ意識的に争うことを理由として、生存競争の優勝者は同族間で個々を相手とした時の者であるかのように信じ、飢餓で苦しむ食人族が他の村落で暮らす同族の肉を食物にする特殊な現象を全ての生物界の法則として当てはめるに至っては、デタラメも甚だしいものだ。

7-5 下層階級はどうして人口過多になるのか

まさにこの通りである。生物界を通じての食物競争は、食物にしようとする種族と食物とされる種族の間での生存競争であり、種族単位つまり最も広い意味における社会単位の生存競争である。社会主義は、社会の単位をこの最も広い意味における人類種族とし、人類を他種族の上に生存競争の優勝者としようとするものである。したがって、社会主義の時代においては、先に説いた理想を実現する競争である個人単位の雌雄競争があるとともに、この社会単位の現実を維持する競争である食物競争が他種族を相手として存在することは言うまでもない。それならば、社会主義時代における食物競争に関わる人口論は、どう考えるべきなのか。

我々はここで生物学が非常に高貴な光を放つのをみるとともに、ダーウィンの偉大さが雲を突き抜けて高く伸びているのを仰ぎ見る。彼は言う。——「生物種族は、その種族の生存進化のために必要なだけの子を産む。」と。哲学史の初めから、宇宙に目的があることは、思弁によって解釈されることを要求されてきた。そしてダーウィンによって著しく発展した生物学は、宇宙一切のものが目的を持つことを科学的研究の帰納として説明する。ウグイスはさえずりたいと思うから美しい鳴き声なのか、美しい鳴き声があるからさえずりたいと思うのか。チョウは舞いたいと思うから麗しい羽があるのか、麗しい羽があるから舞いたいと思うのか。ライオンは肉を食べたいと思うから牙があるのか、牙があるから肉を食べたいと思うのか。このようなことは、まさしく今も昔も哲学上の主題である。天地創造説をとるか、もしくは旧式の唯物論をとって宇宙に目的はないと考える見解を支持

³⁷ 原文では「敵の軍団として」となっているが、文脈からすると、「にして」でつながないと意味がねじれてしまう。よって「にして」の意味で訳した。

する者は、ウグイスは美しい鳴き声があるからさえずり、チョウは麗しい羽があるから舞い、ライオンは牙があるから勇猛なのだとする。それなのに、生物学は厳粛な事実から帰納して天地創造説を覆し、旧式の唯物論を打破し、あらゆるものが進化するという宇宙目的論を確立した。道ばたの一輪の野花から、雲に向かってそびえる松や柏、地上をはっている昆虫、花の間を飛ぶ小鳥、海の波の中でほえるクジラ³⁸、開けた谷をわたる蛇や龍、犬、猫、馬、猿、明け方に赤々と染まる東の空³⁹にあこがれて鳥のように空を飛ぶ翼を科学者が発明するのを待っている人類に至るまで、宇宙のあらゆるものは全て生存進化の欲望の結果として生じたものであることを帰納した。宇宙には過渡的な生物である人類の理解できない永遠の目的、相対的な存在である人類に考えもつかない絶対の理想がある。この目的と理想があるからこそ、全ての生物はそれぞれの目的を達し、それぞれの理想を実現しようとして、歌う目的がある者は美しい声を進化させて歌い、舞おうという理想がある者は麗しい羽を進化させて舞う。哲学史があつて以来続いた両派の対戦の結論は、生物学の厳粛で公正な裁判官によって証拠調べがなされ、明白に決定された（今の生物学者の多くがこうした金の冠をかぶった裁判官ではなく、むしろ死刑執行者という卑しい職業に満足していることは哀れむべきことである）。——人口論もまた宇宙目的論の生物学によって理解される。つまり、全ての生物種族がその生存の維持もしくは進化のため、環境（競争者となる他の生物種族をも含んで）に適応しようとしてそれぞれが必要な形をとってそれぞれの生物種族に進化している。それと同じように、生存進化の目的のためにそれぞれ必要なだけ子を産む。この「全ての生物種族は生存進化の目的を持つ」ということは、まさに人類という一生物種族を生存進化させようとする社会主義がよって立つ所である。社会主義は、生物種族は生存進化の目的のために必要なだけ子を産むということから、今日のような驚くべき人口に決してマルサスのように恐れる必要はないし、これがなければ人類は滅亡するか、もしくは進化することができず、その必要に伴う結果なのであると信じている。生物学は全てにおいて社会主義の基礎である。食物競争が同種族間の個々の生物を相手とする、もしくは相手となる他種族と競争する時にも競争の単位は個々の生物であるとする事などは、まさに偏局的個人主義の思弁的な独断論が導いた誤りであるが、ダーウィンの偉大さでマルサスの類が水平線以上に突出した大きな点を包み隠すことなどは天才を知る道ではない⁴⁰。つまり、生物種族はその生存進化のために必要なだけ子を産むという社会主義の科学的基礎を知ることこそが天才を知る道なのである（だから、ミュンヘンの生物学者大会において、生物進化論は社会主義に至ると恐れて排撃に努めた者がいたことは取

38 原文では「鯨鯨」となっている。これは雄クジラと雌クジラのことであるが、区別すると面倒なので、「クジラ」と一括した。

39 原文では「紅流るる東天」となっている。「東天」というのは東の空のことであるから、「紅」というのは夜明けの太陽のことであろう。よって、その意味で訳した。

40 後半部分の意味がよくわからない。「ダーウィンの学説は、マルサスの人口論の欠点を隠すために用いるべきものではない」ということだろうか？ それとも「マルサスが限界とした人口を超えていることについて、ダーウィンの学説を使って『淘汰されるから大丈夫だ』などと言うことは間違いだ」ということなのだろうか？ いずれとも言いかねるので、原文のままに訳した。

るに足らない愚かな妄想であるが、生物進化論が社会主義に至ることをある不明確な観念で推察したと称すことはできよう)。我々はダーウィンを研究する者に向かって二つだけ注意を求める。つまり第一点は、ダーウィンは生物進化の事実を確かめた点、その説明として極めて貫徹していないとはいえ、生存競争説の端緒を開いたという点において偉大な人物と評価せよということである。そしてもう一点は、宇宙目的論の帰納に導き、全ての生物種族は生存進化の目的のためにそれぞれの形をとってそれぞれの種類に進化し、その目的のために必要なだけを産むという厳粛な事実を示した点において永久不滅のものにせよということである。

人口論はダーウィンの与えた結論の上に立ってのみ理解できるのであり、生物進化論以前の過去の知識を継承して満足している今の経済学者らの多くの言葉は一つも価値のないカエルの鳴き声にすぎない。彼に従えば、種族の生存進化のために必要な子の数は、下等な階級の生物種族から高等な階級の生物種族に進むに従って減少するという。例えば、マルサスの等比数列とか、世俗のねずみ算とかいうあのネズミの出産数は、一年で一匹の母ネズミから八千匹に増える割合の出産数である。ハチは一年に五、六万匹を産み、ハエは一匹で二十万の卵を一度に産み、十五日間で生育し、一週間ごとに百万倍に増加する割合であるという。タラは腹の袋の中に一千万個の卵を持っており、サナダムシ⁴¹は一つの節に一億個の卵を持っており、しかも体全体では百五十も節がある。アブラムシは数年間で全地球を覆うほどの増加率であるし、ハックスレーの計算によると、ほとんど全ての植物は八、九年で全地球を覆い尽くす割合で種を作るであるという。それなのに、高等な階級の生物種族に進むに従ってその数が減っていき、鳥類もしくは獣などに至っては、誰もが知っているように、非常にわずかな数になる。ダーウィンはこのような無数の事実によって、「全ての生物種族は種族の生存進化の目的のために必要なだけ子を産む」と言う結論を帰納したのだ。つまり、全ての生物種族（人類について言えば人類社会）は種族の生存進化（人類について言えば人類社会の生存進化）のために、必要な子を産む（人類において人口の多さは社会の必要による）のであり、もし種族の維持に莫大な数が必要なのに必要な出産数がなければ、下等生物のようにたちまち種族の滅亡を来してしまう⁴²。二十万匹のハエは各々同族である二十万匹と弱肉強食の生存競争をしたり、百五十億のサナダムシが各々百五十億の同族と生存競争をするためにそんな莫大な数を産むのではないのだ。つまり、種が最も多い植物は、その種子が風もしくは虫、鳥らによって偶然持ち運ばれやすい環境に置かれ、偶然に他の生物の食物となるのを免れたわずかな幸運な種によって種族を維持しなければならない必要があるため、全地球を覆うほど多くの種子を作るのである。一億個の卵を持つ節が百五十節あるサナダムシのような生物は、そのうち偶然に水中に入

41 原文では、虫偏に條を合わせた字と虫が並べられている。おそらく「条虫」のことであろう。「条虫」とは、扁形動物の総称で、俗称はサナダムシである。

42 原文の後半部分は、「若し、必要なる莫大の産子なくしては下等生物の如き忽ち其の種族の滅亡を来す。」となっているが、これでは言葉を補わないと全く意味が通じない。この文章には欠落があるのではないかと疑われる。ともかく、意味が通るようにするため、言葉を多く補って訳した。

るものがいて、さらに偶然出会う特定の魚に偶然食べられるものがある。そしてさらに偶然その体の内に入り、またさらに偶然その魚の肉が人に食べられ、食べられる時もまた偶然生のまま食べられなければならない。こうして初めて人の腸内に入り、それによってようやく種族を維持できるので、それほど膨大な数の卵が必要なのである。まさに、食物の生存競争は、目的が種族の維持であり、単位が種族であり、相手は他の種族である。したがって、種族対種族の競争において多くの劣敗者が出る下等な生物種族は、多くの劣敗者の犠牲を出してもなお種族を維持するのに足りる——いや、むしろ種族を維持するのに足りるだけの分子を生存させるために、多くは劣敗者として犠牲となるのを覚悟でおびたらしい数の産卵をするのである。それなのに、生物が高等な階級に進むに従って、子供の数がおびたしく減少するのは、同じ種族を生存させるという目的の中で、対他種族との競争では劣敗者をさほど出さない程度に進化したからであり、必要がなくなった故の減少である。全ての生物種族の中において人類種族の子供が最も少ないのは、その必要が最も少ない程度までに進化した生物種族だからなのである。ダーウィンは完全にマルサスによって誤った考えを植え付けられていたので、生存競争がいかに生物界を通じて激烈に行われるかを実験において証拠立てようとした。そのために、他の生物種族の侵入を防いで、植物が驚くべき速度で繁殖することを実験したという例がある。この実験のせいで、生存競争は同種族のおびたしい分子が各々それ自身が生存する目的のために他の同種族の分子を排斥せしめようとする競争であるとの意味に解釈され、ダーウィンはマルサスの人口論を全ての生物種族に拡充し、進化論の観点から確かめたかのようにってしまった。つまりこれが、個人がそれ自身の目的を持っているという個人主義である。だから、ダーウィンによって確かめられたマルサスの人口論は、経済学者の中で少し知識が多い者にとっては社会主義に対する最も堅固な砦であり、マルサスの人口論は今日ほとんど社会進化論の上まで延長された状態になった。しかしながら偉大な思想史の革命家は、ささいな浮雲によって全ての輝きを覆い隠されはしない。今入り乱れている生物進化論者らは、彼の完全な御姿を拝むことができないが、その雲間から投げ込まれる光は明らかに彼らの目を射ているのである。丘博士がどういう理由から特に「人種」だけに限ったかはわからないが、——なぜならば、単位としては国家もあれば民族もあり、かつては固い団結であった宗教団体もあり、今日は大連合を作っている階級もあり、また人類という他種族に対して一体をなしている社会もあるからである。——無知で残忍な暴論が「人種の生物進化のために」という権威から演繹されたことから見ても、決してダーウィンの導いた宇宙目的論の例外ではないことがわかるだろう。もし経済学者が、生物種族は種族としての生存進化の目的を持つということを認識しながら、なおかつ人口論を社会進化の目の前に横たわると考えるのなら、まさに野蛮人と言う他ない。種族の生存進化の目的のために劣敗者となることを余儀なくされ、今日多くの子を産んでいる人類という生物種族が、社会主義の実現によって食物競争の劣敗者を少なくするとともに（「なくなる」とは言わない。その理由は後に説く）、種族の生存のために必要な子供が、つまり人口が等比数列の割合で増え、三階、

四階の建物を建てるほど増加し、その増加によって社会全体の餓死を引き起こし、逆に生存のために活動してきた人類種族が滅亡に至るとは、何とも乱暴な結論よ！ 実に博士とか、ドクター⁴³とかいう輩は、アメリカン・インディアンに鼻眼鏡を掛けたような者でしかない。吾人は繰り返して断言する。今日の驚くべき人口は、人種種族の進化が未だ低度の状態であるため、他種族との競争において劣敗者が絶えず生じることから来ており、種族が生存するための必要に伴う自然法則であると。生物学以前の経済学者ならばいざ知らず、全ての社会的諸科学に土台を与えるべき最も重大な任務を帯びた生物学者までが——ああ丘博士よ——偉大なダーウィンを一介の凡人であるマルサスのような人物の足で踏みにじらせ、恥とも思わず平然としているとは何事か。マルサスが産まれてくる子のうち四分の三は赤子の時に死ぬか、あるいは通常の四分の一の寿命で死ぬかのどちらかであると言ったのは、まさしく未だ人類の進化が完全でなく、四分の一だけで人類種族の生存進化をなし、絶えず四分の三の劣敗者を出すことを余儀なくされているからであると考えよ。自然物が物質的に欠乏する、あるいは母親が遺棄、放任などをする（動物の多くはそうである）ために最も種族の生存が困難な野蛮人は最も多く子を産み、略奪階級の圧力下で生存に困難なことが最も多い今日の下層階級は、いわゆる貧乏人⁴⁴の子沢山を実践する必要がある。何事も自然の法則である。こうして彼らは、多くの子の中から幸運な機会によって自己を生存させ（つまり現実を維持させ）、進化させる（つまり命を継続して理想を実現させる）者を得ることができる。他の多くは、マルサスの言ったように、四分の三までは赤子の時に栄養失調と腐敗した空気が充満した裏通りの長屋の中で死ぬ。そこを生き長らえた者も、過度の労働と低度の生活のせいで通常の四分の一の寿命で——ラッサールの言ったように——順を追って餓死するのだ。我々は、貧民階級のいわゆる人口過多を貧民階級それ自身のために必要なものと捉えるのである。彼らは子沢山でないと、ずっと昔に継続した命は絶たれていたであろう。それはつまり、生存競争の完全な劣敗者として滅亡していたであろうということである。ただ、進化の法則は平等の愛で彼らの生殖欲を驚くほど高ぶらせた⁴⁵ので、彼らは多くの劣敗者を出しているにもかかわらず、今なお辛うじて命を継続して生存し、進化することができたのだと言える。生殖欲の高揚が愛であるとの言葉に向かって君子の軽蔑を表してはいけない。旺盛な生殖欲の始まり⁴⁶は決して今の不幸な労働者階級からだけではない。我々日本人は、現に雄略天皇⁴⁷のころまで母子、兄妹の間はもちろん、馬姦、鶏姦、犬姦という驚くべき鳥や獣との生殖関係⁴⁸が、刑罰によって禁止され、もしくは

43 原文は「ドクトル」とオランダ語読みを書いているが、今は英語読みが一般的なので、読みを改めた。ただ、どちらにせよ、「博士」の意味なので、ここで博士の後に続けるのはあまり意味がない。

44 原文では「貧乏人」となっているが、明らかに誤植である。

45 つまり、子沢山でないと滅亡してしまう者には盛んな生殖欲を授けて、平等に生存できるようにしたということ。

46 こも原文では「開」の門をとった字（中国語の簡体字に相当する）が書いてある。前に出てきた箇所は、「はじめ」と読んだが、ここでは文脈に合わせ、「始まり」と読んでおく。

47 五世紀後半の天皇。四七八年に中国に朝貢の使いを出した「武」とは、この雄略天皇のことであろうと見られている。なお、このことは、『古事記』の仲哀天皇の項にあり、雄略天皇というのは誤りである。第四編でも、再度引用されている。

48 いわゆる「獣姦」のこと。古代、中世のヨーロッパでも同じようなことがあったと言われる。

は祓^{はらえ}⁴⁹をして神に謝罪したと言うほど旺盛な生殖欲を持っていたことを顧みよ。日本だけでなく、モーセ⁵⁰の律法においても、「婦人は牛馬の前に立って交わってはいけない。これを犯した者は死刑にする。」として厳罰によって禁止されたほどであった。こうした刑法とこうした旺盛な生殖欲は、今日までに進化した我々の感覚では想像さえもできない所であるが、種族の生存が最も困難で、多くの劣敗者を出すことを余儀なくされていた古代においては、人類社会の生存進化のために不可欠で重大な欲望だったのだ。自然法則に誤りと無用なものはない。今日の旺盛な生殖欲は、宇宙進化という大きな目的のために行う神が命じ給うた所と言えよう。——その通りであるならば、今日社会全体がみだらで、乱れて荒廃している様を社会主義の世に至ってから顧みれば、今日の我々がモーセの律法を見たり、雄略天皇が崩御した時の祓を見たりするのとどうして同じでないと言えようか。社会進化論の前にマルサスのがい骨を横に置いたところで何の権威があるのか。社会主義は衣食の劣敗者である貧困を取り除き、子孫の生存を下等生物の方法において維持する多数の出産を不要なものにする。

また、下層階級が人口過多になる理由は、貧困の他に戦争による劣敗者がことごとく下層社会から出るためである。——つまり、彼らは横の階級競争において多くの犠牲を出すことを余儀なくされるように、縦⁵¹の国家競争において常に劣敗者となる。貧困からやむを得ず子沢山になるように、戦争のために必要な結果として人口過多を呼び込むのだ。例えば、今日のフランスは人口が平均値の水準であるため、国際競争に耐えられず、マルサス教徒とは正反対に、「人口が少なすぎては国を滅ぼす」⁵²と言われ、敢えて帝国主義者に限らず、全ての者を通じて憂慮されている。ところが、ルイ十四世の下で侵略を繰り返したり、ナポレオンを擁立して全ヨーロッパを戦乱に巻き込んだりした時代には、人口の増殖は驚くべきものであった。中世史の戦国時代でも同じで、その必要からマーカントイル・システム（重商主義）が思想界でも実際の政策上でも人口増殖を第一の目的としていた。増殖した人口は戦乱の劣敗者となり、その中のわずかな部分の生存者によって下層階級は維持されていた。今日の日本において年々五十万の割合で増加している人口は、戦国時代の中世史の初めから徳川の貴族階級の下で略奪された時代が終わった——つまり、戦争と貧困の長い継続が終わった——と思ったら、さらに経済的貴族国の下で依然として貧困が継続され、維新戦争、十年戦争⁵³、日清戦争、日露戦争と絶えず戦争が継続したからである。日本民族としての生存を維持する必要性に伴う人口であり、これらの戦争は人口のはけ口を満州、朝鮮に求めたものではない。未開時代の国家競争を要求する国民の思想のため、戦争及び戦争に伴う貧困による劣敗者となったために多くの人口を生じたのである。つまり、先に説いたように、ウグイスは美しい鳴き声があるからさえするのではなく、チョウ

49 神道で、災い、罪などを取り除くために行う神事のこと。時には物を納めることもある。

50 原文では「モーゼ」だが、モーセと読むのがやや多いので、そちらにした。

51 原文では「豎」となっているが、それまでの用法と整合しない。よって、「縦」に改めた。

52 事実、十九世紀後半のフランスは人口不足に悩み、墮胎を厳しく処罰することを通じて、人口を増やそうとしていた。

53 「十年戦争」とは、おそらく西南戦争が終結するまでの十年間に頻発した動乱のことを指すのだろう。

は美しい羽があるから舞うのではないのと同じである。さえずろうとする目的、舞おうとする理想があるから、美しい鳴き声と美しい羽が生まれたのである。それと同じく、生物進化の宇宙目的論によって今日の日本の人口が増えすぎたのは、人口が増えすぎたから戦争が生まれ、それによって人口増殖が引き起こされた結果ではなく、戦争を目的とする中世的思想の国民、戦争によって優勝者になろうとする野蛮な理想を持つ国家が存在するから増殖するという自然法則に従った結果なのだ⁵⁴。自然法則は、噛むことを目的とする蛇に毒を与え給い、食べることを理想とする狼に牙を与え給うた。国民と国家がこの蛇のような目的と狼のような理想から脱却しない間は、日本民族は永久に下等生物の自然法則に従わされ、人口過多に苦しむだろう。そして階級的感情を超越して言えば、今の下層階級は上層の者と同じく、この低度な進化の道に立っている。だから、社会主義は国際戦争へと発展しやすい専制的な制度を取り除き、資本家の貿易戦争を引き起こしている産業的専制制度を打倒するとともに、いっそう深く国民、国家の目的とする所、理想とする所から一新しようとするものなのである。進化の法則がウグイスに毒を与え、チョウに牙を与えないように、世界連邦の下で万国の平和を目的とし、理想とする社会主義時代においてどうして人口が増えすぎようか（だから、あの日露戦争に際して主戦論をとった帝国主義者と称する者が、人口過多のはけ口が必要だということを理由としたことや、また非戦論を唱えた社会主義者が、意気が盛んであるにもかかわらず、未だ全く大きな勢力ではない二、三の資本家のために戦争が戦われたと理解したことなどは、価値のない皮相的な説明にとどまっており、残念である）。

7—6 人口論総括

我々は純正社会主義者として全ての階級的感情もしくは利益から超越し、科学的研究の態度を汚してはいけない。つまり、人口論を資本家階級のそばから個人主義によって解釈し、個人としての貧民に道徳的責任を負担させることが誤謬であると同様に、下層階級のそばから個人主義によって人口論を拒絶し、資本家が貪欲で非道だから貧困なのだと論じること、全く社会主義と連絡のない独断論であるということだ。——明らかに言えば、下層階級のおびたしい人口は上層階級の犠牲となる社会進化の過程なのだ。さらに具体的に言えば、一将の功を立てるために万骨が枯れる⁵⁵ため、一人の栄華を築くために数千の小作人と数千の工夫が貧困のままで世を去り、凍えや飢えで倒れるため、多くの人口が必要とされ、また必要とされているのだ。我々が初めに下層階級の道徳的謹慎、つまりマルサスのいわゆる抑制というもの逆さまにして、「下層階級の旺盛な生殖欲がなければ、今日の富の階級はない」と断定しておいたのもこの意味なのである。個人主義の思想によって

⁵⁴ 原文は「生物進化の宇宙目的論によりて日本今日の過多なる人口は、人口過多なるが故に戦争生ずるに非らず、戦争を目的とする中世的思想の国民、戦争によりて優勝者たらんとする野蛮なる理想の国家なるが故に増殖しつつある天則なり」となっているが、文章がねじれていて意味がわかりにくい。よって意識した。

⁵⁵ 中国の古典に、「一将功成りて万骨枯る」として戦争によって一般庶民が犠牲になることを嘆いた一節がある（具体的には、「曹松、己亥歳詩」）。

眺めれば、貧民の生殖欲は卑しむべきものであるように、我々のこうした断定は下層階級の個人としての権利を無視する言葉として響くことは言うまでもない。社会主義者はどうなるとも個人主義者であることができない。もし社会主義の名の下に貧民階級の個人としての幸福を主張すればよいと言う慈善家がいるならば、鉄よりも冷たい科学によって一切の理論を引き出す⁵⁶我々は社会主義の忠実な僕であろうとするために、こうした慈善家を軽蔑すべきである。自分自身の不満によって導かれ、社会主義の大傘の下に集まってきた者、もしくは百年前のフランス革命時代の個人主義を継承し、その独断論に対してだんまり⁵⁷を決め込んでいる者は、今の下層階級の貧困を上層階級の罪悪のせいにし、上層階級の者を見る時には全て犯罪人であると見なす。進化の法則という自然法則には不合理なことはない。それなのに、こうした独断論の上に社会主義の旗印を立てるため、高潔な人格に基づいた熱烈な主張であるにもかかわらず、「それならば神は偏っていて、能力は不完全で欠乏があるのか」と反撃され、社会主義を嫉妬が凝結した、社会の不正を嘆く業者の巢窟であるかのように誤らせるに至っている。人類社会は渾然とした一つの個体なのである。貧民とか、富豪とかいうものは、各々社会という一個体の部分なのだ。つまり、個人とは社会のことであり、貧民という個人が今日犠牲となっているのは富豪という他の個人が罪悪を働くためでない。社会の進化のために、社会自身が社会自身のある部分をまず進化させる必要があり、社会自身の他の部分を犠牲としているのだ。故に、今日幸福な環境に置かれている富豪も貧民の肉体の一部である。犠牲とされている貧民も富豪の肉体の一部であり、ドイツ皇帝も道ばたの乞食の一部であり、柳の陰⁵⁸で売春する娼婦もオランダ女王の一部である。哀れむべきマルサスも我々の一部であり、さらに笑うべき博士、ドクターらも釈迦もキリストの一部である。人類は、個人主義時代の仮説のように、契約以前もしくは征服、併呑の前は個々に存在していたのではない。生物進化論の科学的基礎によって証明されているように、元は一つ的人类からアメーバのように分裂した一個体の部分であるにすぎないのだ。個体は個体としての生存進化の目的を持つ。この目的を達するために、それぞれがその目的に適応する形をとる。つまり、人類社会という一個体の生物——人類を空間を隔てて分子としている一個体の生物は、生存進化の目的のために、その目的に適応した形をそれぞれ進化の過程においてとる。我々はこの説明のために、少しばかり人類という大きな個体を下等生物の一匹としての個体と比較しよう。もちろん、単に比喻をもてあそぶにすぎない生物学以前の古い社会有機体説（後の『いわゆる国体論の復古的革命主義』で説く）のように、社会を首、足、胴、腹がある一個の体になぞらえて理解してはいけないことは言うまでもないが、今日的人类社会において下層階級を犠牲者と取り扱っている理由は、完全にこの大きな個体の進化の程度が純粋な下等生物の程度と同じだからである。下等生物は物質的危険、あるいは他の生物種族のため、常に生存の困難な進化の

⁵⁶ 原文では「行る」となっているが、どう読んでいいかわからない。よって、文脈から意味を推測して訳した。

⁵⁷ 原文では「暗闇」となっている。「暗闇」には裏でのひそかな争いという意味と、歌舞伎における「だんまり」という意味がある。この文脈では後者のほうが妥当だと思う。

⁵⁸ 原文では「柳蔭」となっているが、本文のとおりで合っていると思う。

程度であるから、一匹としての個体のある一部を犠牲にして走り、犠牲にされた部分はたちまち補われ、元の形に戻って生物としての生存の目的を達する。ミミズ、ヒルなど逃げられないものは、身体の一部を切断されても、たちまち元の形を補う。カニはハサミを失っても、間もなく小さなハサミが生えてきて元の形が補われる。イモリが四つの足を失い、トカゲが尾を切られて逃げても、それぞれたちまちその欠損を補って元の形に戻るの、皆こうした犠牲を取って覚悟した方法によって生存の目的を達する他ないという必要性に基づくからである。人類社会という大きな個体でも今日の状態のような進化の程度では、こうした下等生物と同じく犠牲を出して生存する方法をとるしかないのだ。もっとも、地震、洪水、風、波などの物質的危険は次第に避けられるようになり、食物とする動植物などの他の生物種族との生存競争及び自分たちが食物にされる微生物などとの生存競争においてもまた次第に勝利者の地位に進んでいる。しかし、それでもなお小さな政治的単位——つまり国家——、あるいは小さな経済的単位——つまり会社、トラスト——が激しい生存競争をしているため、それぞれの単位として個体の生存を維持するために、その単位の中で生きる個体の欠損した部分を絶えず補う必要がある。詳しく言えば、国家の下層階級——つまり万骨として枯れる運命に立たされる階級は、国家の欠損する部分として人口過多によって補われ、会社、トラストの下層階級——つまり略奪されて貧困にあえいでいる労働者階級は、経済、社会の欠損する部分として人口過多によって補われるのだ。——人口の増加は恐れるものではなく、これがなければ貧困と戦争によって人類は、はるか昔に地球からその姿を消していただろうからである。その通りである。人口の増加は恐れるものではない。ただ恐れなければいけないのは、下層階級がどうしてむやみに死ぬにすぎない子の多くを産むのかを疑い始めたことである。——そして彼らは、疑問に対して科学者が答案を用意するのを待たず、まるでライオンが鬣たてがみを振るわせるように怒り、犠牲の義務を拒絶し始めた。おお讚美すべき自然法則よ！ 彼らはかつて豚のように産み落とした多くの子を奴隷として使われ、農奴として厳しい取り立てを受け、それによって涙を流してあの世の浄土に救いを求めたが、自分たちが犠牲とされていることを知らなかった。今日もなおそのことを知らず、小作人と賃金奴隷は多くの子を抱き、背負い、その子をなでてため息をつく——ああ子供たちよ、お前たちはどうやってこの道の険しい世で立っていけるだろうかと。社会の進化は同胞意識が深く、広くなることである。古代においては兄妹の間の同胞意識も浅く、他の村落国家はもちろん、酋長、君主についても理解できない存在であるかのように考えており、同胞意識は狭かった。それなのに、社会の進化とともに同胞意識を広く国家の全て、世界の全てにまで及ぼし、同時に深く親子兄弟を自己と同一もしくは同一以上に愛するようにさせた。人口論の解釈が要求されたのは、この愛の満足を求めるためである。マルサスの時に至って人口が増加したのではない。経済学が講義されてから、日本の出産数が年五十万になったのではない。近代よりも中世のほうが、中世よりも古代のほうが、はるかに人口の割合は高かった。ただ、過去においては浅くて狭い同情にしかなかったのが、子の死滅を痛切に感じず、また自由に成長していた上層階級に

ついて疑う所がなかっただけなのである。しかしながら、自然法則は停滞するものではない。現代の奥深くて広い同胞意識は、決して奴隷、農奴として犠牲を強いられることに甘んじていた時代のものではない。こうして同胞意識は、人類を進化の法則というレールに乗せてフランス革命を起こさせ、パンと憲法の要求を叫んで国王、貴族を打倒した。パンは与えられず、投げられた憲法の上に誕生した新貴族は、再びパンの略奪を始めた。父と母は油よりも濃い愛のしずくをうたた寝をしている無邪気な赤子の顔に落とし、依然として生きる道が険しいことに泣く。マルサスは僧服の袖を振るって、冷酷にも貧民に道徳的責任を問う。しかしながら、自然法則は彼らの手から知識を奪い、彼らの目から美術を奪い、彼らの耳から音楽を奪うが、彼らの袖を引っ張って肉欲の街に誘い、彼等の唇を開けて濁り酒を注ぎ、彼らの寝具までも奪って夫妻を常日頃添い寝させ、あたかも娼婦が客を酔わせるようにもっぱら生殖欲を挑発する。これによって子は産まれる。膝に抱かれる。——子を愛するという点において聖母と我々の母親とで何を選び分けようか。子の愛のためなら、焼け野原で鳴くキジさえもワシのようになってイタチに向かう。マルセイユ城に突撃した部隊の先頭は、非常に繊細な女子であったことを記憶せよ。——革命は愛の満足を求めて起こる。マルサスは、だまされた貧民の行くと言われる極楽に赴いて、昇天者が増えすぎるといふ人口論を唱えよ。深くなった同胞意識を持つ父母が、膝で眠っている多くの子を眺めて、将来を心配する目を上げて上層階級を眺める時だ！ ここで広がった同胞意識は、洪水のような勢いで馬車をひっくり返し、ダイヤモンドを飛ばし、肉の食卓を打破し、舞踏会のガラスの窓を破り、ここに革命となる。——人口過多は社会の必要に基づいたのであって、上層階級はこの意味で恐怖せよ。

ただこのようなことがあるだけである。矢や弾丸で⁵⁹引き裂かれた社会主義の赤旗が博物館に置かれて、平和と平等を享受する国民の物語となる世の中において、人口の増加が恐るべき増殖だと考えるのは理由のないことなのだ（社会主義の世における人口について、さらに後に説く）。人類は他の生物種族の中で最も進化した者であるから、最も犠牲となる劣敗者が少ない。したがって、最も出産数の少ない生物種族なのである。そしてさらに、もっと高等な生物種族にまで進化する過渡的な生物として、さらに犠牲となる劣敗者を少なくし、したがってさらに出産数を少なくしていくであろう生物種族なのだ。今日人類がさらに進化して社会主義が実現された後、つまり犠牲となる劣敗者が少なくなった後も出産数が少なくならず、むしろ等比数列の割合で増え、それによって人類全部が餓死する（もしくは実現された社会主義が破壊されて、進化論以前の思想のように社会が循環するに至る）と考えるのは、あたかもイモリが四つの足の欠損を必要があつて補っているのを見て、それを四つの足を犠牲にして生存を全うする必要のないほどに進化した人類の手足に推し及ぼし、「人類は少しも四つの足を欠損しないから、我々の手は八本となり、十六本となり、三十二本となり、等比数列の割合で増加する」というのと同じく、事実を無視し

⁵⁹ 原文は「矢丸」となっていて、著作集では「ママ」と注記されている。『北一輝思想集成』では「矢丸（やだま）」のことだと見ている。その読み方で説明がつくので、その読みにしたがって訳す。

たものである——君たちの手を開いて見よ。イモリ⁶⁰社会の大学教授であっても、こうした推論をするというのは想像できないことである。もちろん、通訳の役割として存在する日本の学者らは、こうしたことについての責任主体ではない⁶¹ことは言うまでもなく、責任主体は我がダーウィンである。彼はマルサスの独断をヒントとして受け取ったため、事実の帰納としては「生物種族は種族の生存進化のために必要なだけ子を産む」という社会主義の基礎を与えながら、他方ではこれを打ち消すような「人類の進化はその過大な繁殖力によって競争し合うためである」という意味の個人主義を裏書きした。この言葉が、あのベンジャミン・キッドに採用され、『種の起源』以後の大著であると言われる『社会進化論』となり、さらにそれが今の学者階級に響き、社会退化論か滅亡論か理解できないものになってしまった。人類の過大な繁殖力は競争し合うためではない。他の生物種族との生存競争において種族を生存させるためのものである。単に繁殖力の強い者が個々対個々の生存競争を激しくし、最もよく生物種族を進化させるならば——軽蔑すべき推理力だ！ ハエなどは二十万個の卵を産み、一週間ごとに一億匹になるほど過大な生殖力を持つから、人類の文明を二十万倍し、さらに一億倍した進化をし、我々の滅亡した死体の上に黒山のようにたかって、自身の文明国を建設していなければならない。サナダムシは百五十億個の卵を産む過大な生殖力を持つから、人類よりも百五十億倍も高等な進化を遂げた生物として現在の世はサナダムシの二十世紀に入り、サナダムシのキッド君がサナダムシの進化論を著し、ハエのような学者階級の崇拜を集めている時代でなければならない。マルサスに手を合わせ、礼拝しているような今の学者らにとっては、彼キッドなどは金の輝きを放つ頭脳の持ち主なのだろう。我々から見れば、二、三の言葉で侮蔑し、もてあそべばよい三尺の子供である。

我々は、西洋人の言葉で筆を走らせている日本の代表的学者であるとして指定した理学博士丘浅次郎氏の『進化論講話』を忘れていた。そこではこう言っている。「世間には生活の苦しみは競争の激しいことに基づくので競争の激しいのは人口の増加が原因である、それ故子を産む数を制限することが必要であると言うような考えを持っている人もあるが、さきに述べた所によるとこれは決して得策とは言われぬ」と。我々が、新マルサス派の社会改良策が目的のない盲動であったことを博士とともに知っていることは言うまでもない。しかしながら、博士が結論において振り返り、「さきに述べた所」と言った『進化論講話』の全部は混沌としており、ただ事実を羅列しただけで一つも理論がない。そこにあるのは、同族間個々の生存競争によって全ての生物種族は進化するものであるから、過大な繁殖力を持つ人類の進化はマルサスの人口論によるという意味の説明である。しかしながら、これもまた等しく今の生物進化論そのものに組織がないためである。我々が研究に忠実な丘博士を特に指定したのは、日本の代表的学者であるとの理由であって、博士一人の責任と

⁶⁰ 原文では「蝶蝶」だが、「蝶蝶」では意味をなさない。「蝶」と「蛭」が虫偏で共通しているので、おそらく誤って「蝶」を重ねたのであろう。よって、「蝶蛭」と修正して訳した。

⁶¹ 直訳的に欧米の学説を持って来る学者に対する痛烈な皮肉である。

されるべき過失だという意味ではない。

社会主義は進化論の他に漏れだして、生存競争を押しとどめてやめさせる、もしくは緩めようとするものではないことは以上に説いたとおりである。他の生物種族に対して全人類という大きな社会単位においてする現実を維持するための食物競争がある。そして先に説いた同族間の個々に対して個人単位で行う理想を実現するための雌雄競争があるのだ。

第八章

8—1 人口は将来どうなるか

我々はこので人類が消滅していくであろう過渡的な生物であることを説こう。それはつまり、生物進化論の結論である。今日まで生物進化論には結論がない。

人類が今日までに達した知識によると、天地のあらゆるものはことごとく進化していると言える。そして一切の進化は生存競争にあると言うことができる。我々人類種族のように、明確な意識をもって進化に努力しているわけではないと考えられている下級の獣、鳥類から昆虫、魚介類に至るまでが持つ、生物として生存しようとする欲望そのものが進化なのだ。そしてその意識というのは、進化の程度を異にすることから来る程度の差のことであって、生存の欲望——したがってこの進化の意識が宇宙絶対の意識なのである。我々はあまり哲学的思弁を仕事にするべきではない。とにかく我々人類種族に生物として生存しようとする欲望があって、その欲望のために生存競争があるならば、人類がさらに進化する過渡的な生物であることは、進化論そのものに対して懐疑的な態度をとらない限り、十分肯定できることだろう⁶²。

我々は先に述べた人口論を継続して語らなければならない。つまり、社会主義の世に入ってから、社会単位の生存競争という人類という大きな個体を単位とした他の生物種族に対する生存競争及び人類個々を単位とした他の個々の人類に対する生存競争はどうなっていくのかという点である。

推論としては二つのことが導かれるだろう。その一つは、社会主義の実現によって生存競争の劣敗者が少なくなるとともに、出産数と死亡数が均衡を保つだろうと考えることである。こう推論しようとすることは、その者の自由であるし、生物学の事実と理論にぴったり適合していることは言うまでもない。もちろん、蒸気と電気の生産機関によって——あたかも虎にとって牙が生産機関であり、ウグイスにとって翼が生産機関であるように——人類が食物にする生物種族との生存競争において完全な優勝者であることができるとい

⁶² 原文では「兎に角吾人々類種族が生物として生存せんとする欲望あり、其の欲望の爲めに生存競争あらば、人類の更に進化すべき経過的生物なることは、進化論其者に対して懐疑的態度を執る者に非らざるよりは充分に肯定すべし。」となっているが、後半部分の「懐疑的態度を執る者に非らざるよりは」の意味がわからない。とりあえず意識を試みた。

う事態は、社会主義の実現後直ちに到来する可能性がある。しかし、人類を食物にしようとする生物種族、つまり微生物などに対し、今なお完全な優勝者であることができていない。したがって、疾病による劣敗者を犠牲として出しても、人類種族の生存進化に支障がないほど多くの人口を必要とすることは明らかである。また、地震、火山、洪水、風や波などの物質的危険もある。しかしながら、今日の野蛮人が猛獣に対する生存競争にせわしく、また原人が猛獣との生存競争のために湖の上に家を建て、あるいは木の上で眠っていたというような状態から進化して今日の我々になると、とうとう猛獣に対して完全な勝利を得た。それと同じく、医学の進歩によって猛獣よりも困難な競争者である微生物に対しても、猛獣との生存競争のように、完全な勝利を得ることは疑いもないことである。したがって、疾病によって欠損する部分を補う必要のために人口が必要とされる時は終わり、それとともに必要性は減少するだろうと考えられよう。自ら経験的である⁶³と称する学者階級にとっては、目の前に野蛮人の状態を見るように、発掘された原人の遺跡を見るようなことがなければ、こうした推論に対しておそらくは「空想」という慣用語を放って嘲るだろう。しかし、もし彼らがその遺跡と状態を見て、今日の文明にまで進化してきた原理を推論できる能力があるならば、さらに今日にまで進化してきた原理をたどり、今日から進化していくと思われる状態も、同じ推理力によって描かれなければならないというのが筋である。病死者（今日では社会的原因によるものが多い）がなくなるだろうという推論は、今日の文明人が猛獣に食べられることがないという今までの進化が、さらに将来に向かって進化するものだとして理解すれば可能であろう。今日発掘されている湖の上にある家、もしくは木の上にある巣のような家も、獣の種族との生存競争に努力していた原始時代には奇怪なものではなかったように、今日少しも奇怪と考え及ばない病院なども、建築物が「類神人」の遺骨とともに発掘されて、遺跡となっている時代には微生物との生存競争に努力していた時代なのだと、大いに「神類」の興味を喚起することだろう。そして今日徐々に取り除かれている物質的危険などもまた進化とともに取り去られるだろう。したがって、出産数と死亡数が均衡を保つとの推論は正当なのだ。

もう一つの推論は、我々の主張しようとする所で、人口はさらに増加するだろうとの見解である。つまり、人類は原人の時代から他種族との生存競争において無数の劣敗者を出してきたにもかかわらず、なお他種族との生存競争において優勝の地位に進むに伴って人口が増加してきた。だから、社会主義の実現によってさらに地位を優勝に進めるようになれば、さらに人口の増加を見るようになるだろうという推論である。我々が先に社会主義の時代において人口が恐ろしい意味で増加するものではないとして、人口の増加が他の意味では想像できることを語る余地を残しておいたのはこのためである。もちろん、自然法則はいかなる者であっても恐怖するものでないことは言うまでもない。今日の人口増加が恐れられるのは、上層階級の階級的利益の見地から見てのことであって、社会の生存進化の上から見れば、不可欠な天の設計なのだ。我々は社会主義の時代に入り、人口がさらに

⁶³ 実証主義的な立場に立つということだろう。

大いに増加することを無限の喜びをもって信じる。——こう言えば、経済学者は口を挟んで言うだろう。「それならば、再び激しい生存競争を繰り返すだろう。」と。我々はこうした小さな貝以外を知らない甲殻類⁶⁴に向かって語っているのではない。——全ての生物種族は単に種族の生存を維持する目的のために努力するだけでなく、種族を進化させようとする理想に向かってさらに強烈な活動をする。ダーウィンが植物で実験したように、全ての生物種族がその種族の敵である他の生物種族が排除された時に無限の繁殖をするのは、敵である他の生物種族の下で無数の劣敗者を出していた生存の方法が障害なく発展するからであることは言うまでもない。しかし、全ての生物種族が生存の維持以上に、さらに繁殖して進化しようとしていることは生物学上の事実である。元の一つから今日の十億人まで繁殖した人類は、種族の生存の意味において劣敗者が出たことによる欠損を補うために多くの人口を繁殖させていた。それに加えて、さらに人類自身の進化によってダーウィンが植物で示したように、人類の敵である猛獣または微生物などの他の生物種族を排除し、もしくは人類を敵とする他の生物種族である動植物を牧畜または農業の方法で征服し、もしくは奴隷として繁殖させ、それによって今日のような人口にまで増加し、今日の進化にまで到達したのだ。——だから、人口の増加は二つの意義を持っていると考えられる。一つは、他種族との生存競争において劣敗者による欠損を補うという現実を維持する目的から行う種族生存の結果としての意味である。もう一つは、他種族との生存競争において劣敗者が少なくなっていくため、理想の実現という目的から行う種族進化の結果としての意味である。このことから、我々は社会主義の時代に入って出産数と死亡数が均衡するという第一の推論を超えて、社会主義の時代に入るとともに、さらに大いに人口が増加するようになるだろうとの推論をしたいと思うのである。一つは、全ての生物種族は単なる種族生存の目的以外は持たないと考える消極的見地である。もう一つは、全ての生物種族は種族生存の目的を達するとともに、さらなる種族進化の理想を実現しようとするものだと考える積極的見地である。もし種族が単に生存を維持するだけでよいとするものだと考えるならば、まず何よりも理解できないことは、元は一つだった人類から十億に繁殖した社会進化の事実である。具体的に言えば、次のようなことである。古代の君主国時代においては、社会の一分子である君主が生存するために、他の全ての分子が忠順の義務を負担し、種族生存のために犠牲となっていた。それから中世の貴族国時代に進み、社会の少数分子である貴族階級が生存するために、他の武士、平民階級の多くの分子が忠順の義務を負担し、種族生存のために犠牲となっていた。そしてさらに現代の民主国に至り、社会の全分子がことごとく生存し、種族を生存させようとするまでに進化した。生存の維持だけを目的にしているという推理は、この社会進化の事実を無視した推理となるのである⁶⁵。このように、一人だけで種族を生存させたものから、少数階級だけで種族を生存させる段階に進み、さ

64 「井の中の蛙」と同じ意味であろう。

65 原文では「…社会進化の事実と沮格^{そまかく}する推理なるを以てなり」となっている。そして「沮格」のところには、[ママ]と注記されている。「沮」は「阻」と同じ意味なので、「沮格=阻却」と考えてよかろう。ただ、ここで「阻却」という言葉を使う意味がわからない。そのため、この表現全体の意味をはかりかねる。よって、意識を試みた。

らに全ての階級の無い国民によって種族を生存させることを理想とするようになったのは、生存競争の勝利を得る度に生存する人口が繁殖することを法律の理想において表白したものである（法律の理想は社会の理想である。法律の理想である正義が君主国、貴族国、民主国と進化してきたのは、人類社会という生物の理想が進化してきたからである。社会主義者の中で皮相的な見解を抱く者のように、むやみに法律を略奪階級が悪事を働くために作られた⁶⁶かのように解釈するのは無知の極みである）。したがって、この過去の社会の進化を認めるならば、社会主義の実現によって人類の他種族を相手とした生存競争がさらに優勝者の地位に進むとともに、人類種族が進化するという意味で人口が大いに増加すると推論することは困難ではない。今日の人口増加が恐怖の意味で受け止められている事実は、下層階級が犠牲となって死んでいく子供を嘆くことに、深くて厚い同胞意識が耐えられないほどに進化したことと、その進化が社会の進化であり、今の上層階級が社会進化の方法である革命を恐れることから出てくるのである。同じように、種族生存の意味以上に種族進化の意味において増加している人口であるといっても、社会主義時代における人口の増加は恐ろしい意味ではなく、社会進化による増加なのだ。それは例えば、上層階級の人口の増加は、その階級にとっては恐怖の対象ではなく、むしろ喜ばしいことであるのと同じである。社会主義は、人類社会を一個体と見た時には生物界における君主主義となり、人類を個別のものとして見た時には生物界における貴族主義となる。——今の君主、貴族が現実を維持する生存競争において最も優れた優勝者となったため、さらに進化しようとして多くの子を産み、しかもその子供はことごとく生存進化している。それと同じように、社会主義の実現によって社会全体が生物界の上で君主となり、貴族となって完全な優勝者となるに至るならば、人口は理想を実現するために、無限の喜びをもって増殖し、そしてことごとく生存するだろう（我々が第一編の『社会主義の経済的正義』において、「社会主義は上層階級を下層階級に引き下げるものではない。下層階級が上層階級に上ることによって階級が一掃されるという社会の進化である。」と言ったのはこのことである。だから、社会主義が世に言う「平民主義」でないことは言うまでもない）。

そう、我々はこう推論して、人口が増殖することを信じたいと思う。そして社会の進化は、増加した人口という形で個性の発展という競争を激しくし、人口が多いほどそれだけ卓越した個性が多くなるだろうから、その速度は想像できないほどのものになろう。この競争の優劣を決めるものは、社会の全分子である男女の雌雄競争である。男女の全分子は、各々その理想とする男女を得ようと競争することによって、得た理想の男女の結合によって社会の理想を継続された命である子孫によって実現しながら社会は進化するだろう。つまり我々が、人類社会は食物競争の完全な優勝者であるとともに、人口が増加することを想像するのは、人類はさらなる進化をする過渡的な生物であるという生物進化論に基づくのである。そう考えるのは、雌雄競争のなかったアダム、イヴの時代よりも、十億人の男女が雌雄競争をする今日のほうがはるかに進化の速度が速いように、十億人という少ない

⁶⁶ この解釈は、マルクスが示した「法＝支配階級の道具」と捉える考え方である。

人口の今日よりも、さらに多い人口の男女が雌雄競争をすることは、さらにはるかに進化の速度を速くするだろうと信じるからである。

8—2 雌雄競争の推移

だから、社会主義の世においても失恋者が多いことはどうしようもない。現実の苦痛である食物競争がないため、理想にあこがれながらもそれを実現させられない雌雄競争の劣敗者は、社会進化の自然法則が産み出すものであり、我々社会主義者が阻めるものではない。また、阻もうと夢想することもない。理想が高くてそこに届かない現実の苦痛はますます大きくなるのだ。「類神人」は「神類」に進化するため、激しい雌雄競争をする。

しかしながら我々は、今日の社会における雌雄競争（先に説いた所を見よ）から社会主義時代の失恋者を想像してはいけないことは言うまでもない。今日の恋愛は皆階級に邪魔される。そして単に階級によって相思相愛の者たちの恋愛が邪魔されるだけでなく、階級の隔絶のせいで、多くはいわゆる片思いと称する恋愛の最も悲惨な征伐用の矢⁶⁷を受けている。もちろん、社会主義時代においては、相思相愛の者たちが邪魔されることがなく、失恋者というのはこうした片思いのために出てくるものであることは言うまでもない。なぜならば、最も真を得て、最も善を持ち、最も美を持つ、つまり最も「神類」に近い個性を持つ男子及び女子が社会全体の恋愛の中心点であり、したがってこの「神類」に近い者を得ることは、他の「神類」に近い異性であって、それに及ばない多くの失恋者は片思いの苦痛を味わう他ないからである。しかしながら、今日における片思いの失恋者は、不幸な階級によって真、善、美を作成されたため、理想とする異性に向かって進んで、恋愛を要求する道徳、知識、容貌を持っていないのである。わかりやすく言うなら、下層階級の者は上層階級の異性に対して相思相愛を求めながらもそれを得られないという苦痛を味わうはおろか、片思いをすることそのものまでも絶望しているのだ。社会はその多くの分子を犠牲にしてまず次第に理想を実現し、それから全分子にその実現した効果を及ぼす（社会学者のある者は、このことを「模倣による同化作用」⁶⁸と言う）。だから、大体の事実として、上層階級の知識、道徳、容貌はその階級の理想であるとともに、社会全体が模倣して到達しようとするものであるという点において社会全体の理想なのだ。だから、つまらない田舎娘であっても、哲学者の頭脳に恋しないことはない。貞操を売って生活する娼婦も、いかめしい道学者のあごひげ、ほおひげに恋しないことはない。ほこりなどを浴びて走る車夫も奥深い居間から漏れ聞こえてくる琴⁶⁹の音に恋しないものはない。ただ、彼らに片思

⁶⁷ 原文では「征矢」となっている。言いたいことはわかるのだが、これをどう訳すべきかわからない。とりあえず「征伐用の矢」と訳しておいたが、しっくりこない印象は否めない。

⁶⁸ 原文では「模倣にとる同化作用」となっているが、「とる」というつなぎ方の意味がわからない。「よる」の間違ひではないかと疑っている。よって、「よる」に直した。なお、この社会学者というのは、8—5の記述と合わせて考えると、タルドのことであると思われる。

⁶⁹ 原文では「瑟」となっており、[琴カ]と注記されている。「瑟」とは、中国の弦楽器の一つで琴に似た楽器のことなので、「瑟」としても「琴」としても大きな違いはない。そう考えれば、[琴カ]という指摘は無用な指摘である。ただ、「瑟」は今や一般的なものではないし、明治期でも一般的なものは琴だっただろう。よって、わかりやすいように、琴に改めた。

いの失恋がないのは既に片思いにさえも絶望しているからである。彼らはそうしたことを「雲への掛け橋」と考え、既に恋するも、それが実を結ばないことにも絶望し、恋の心を動かさないのだ。——何という悲惨なことか！ 単に自由競争が経済的方面において階級間に限られただけでなく（第一篇の『社会主義の経済的正義』において自由競争を二つに分類して説いた所を見よ）、恋愛の自由競争は階級の城壁内という狭い社会に限定され、その階級の中で理想とされるにとどまる、程度の低くて緩い競争となっている。乞食は乞食を、労働者は労働者を、小作人は小作人を、遊女は俳優を、間の抜けた令夫人は長芋のような若様を、亭主はかかあを、泥棒や火付けをやる男は窃盗やスリをやる女を愛するように。こうした小さな社会の中に限られて、こうした低い理想の異性を得て満足する今日、何の社会進化があらうか。社会主義が実現されて、つまり今の下層階級が上層階級に進んで、全人類が天地のあらゆるものの上に立って君主となり、貴族となる時、恋の世界は九尺二間の狭いものではなく、待合茶屋でもなくなる。恋の理想とされる対象は、遊女ではなく、長芋ではなく、ダイヤモンドでもなく、全人類の多くを観客とした釈迦とマリアの恋である。まさに恋の理想は社会の理想である。社会の理想を社会の全分子である男女が恋することによって、社会はその理想を継続された命である子孫によって実現し、それによって進化する。理想として今日の男女に問え。釈迦、キリストのような真、善、美やマリア⁷⁰のような真、善、美は必ず恋の理想となろう。そしてこれが社会の実現すべき理想なのである。それなのに、今日においては社会は未だそこまで進化しておらず、階級が分裂した状態にあるため、全ての知識、全ての道徳、全ての容貌が階級的理想によって階級的に作られた階級的な真、善、美にとどまっている。我々が前篇『社会主義の倫理的理想』において述べたように、今日の良心は階級的善である。そして知識の多くも階級的真であることは、下層階級の信仰の多くはイワシの頭⁷¹によって行われ、その哲学もまた多くのキツネ、タヌキが絡んでくる運命であるのと同じである（幸いなことに階級を超越することができた我々が今打撃を加えている上層の学者階級の知識も、階級によって作られた哀れむべきものであることなどもそれと同じものである）。つまり、全ての者が社会的に作られたことによって、道徳的判断も知識的判断も、各々その社会的階級によって作成され、階級的善となり、階級的真となる。容貌であっても同じである。今あるものは階級的美と言う他ない。「同じ血族から育っている」⁷²と言うように、今日の美人であっても、醜夫であっても、わずかな個性の変異以外は、完全に階級によって作られた定型的なものなのだ。そしてその「同じ血族」というのも階級的定型が遺伝したものにすぎない。あの刑事人類学者⁷³は社会的階級によって容貌が作られることを知らなかったため、犯罪階級が定型的な

⁷⁰ 原文では「マリア観世音」となっている。「観世音」は菩薩のことだが、マリアのことを「菩薩」と称するのには抵抗を感じる。よって、ここの「観世音」は訳には反映させなかった。

⁷¹ 他の行事はわからないが、節分の際にイワシの頭をひいらぎにつけ、鬼を追い払うという風習が残っている。北がイワシの頭を例に出して、民間信仰を説明しているのは、こうした風習を念頭に置いたものだろう。北によれば、こうした信仰は下層階級の階級的良心によって作られたものなのである。

⁷² 原文では「氏より育ち」となっているが、意味がわかりにくい。とりあえず本文のように訳した。

⁷³ 名前は挙がっていないが、イタリアのロンブローゾのことではないかと思われる。犯罪人類学を創始した人物として

容貌を持っているのを見て、犯罪者はことごとく天性によるのだと断定した。それと同じく（もともとの天性というものがあるのは、犯罪階級が社会的に作られたものを遺伝させる「同じ血族」があるからなのだが）、上層階級の容貌も下層階級の容貌も皆育ちによって社会的に作られ、同じ血族という社会的に作られた祖先の容貌を遺伝で受け継いでいるのだ。資本家階級の唇から残忍な冷笑がこぼれるのは、清貧に甘んじる者のように、素朴で率直でいることができず、権謀術数を図ることを余儀なくされる社会状況によって作られたからである。その丸まげがおごり高ぶって空に向ける鼻を持っているのは、礼を尽くしてへりくだることで尊敬し合う平等を知らず、常に媚びへつらう者たちに取り囲まれているという社会状況によって作られるからなのだ。若様という者が長芋という興味のある代名詞を持つのは、その人を愚かにする畑で耕されている時からの階級的定型によるのであり、令夫人が愛敬も引きつける力⁷⁴もない定型的容貌をしているのは、間の抜けた奥座敷に閉じこめられて作られるためである。その令夫人が遊女との雌雄競争において劣敗者となるのは、決して嘲笑すべきことではない。元は一つの人類から分かれた我々が、風土、気候などの地理的環境によって赤、白、黄、黒⁷⁵の数人種となり、また歴史的環境によって数十の民族となってそれぞれの定型を持つように、階級的環境によってもそれぞれの階級的定型を作られているのだ。労働者の醜い顔、粗野な手足、卑屈な態度といえどもそうである。それらは、当代に社会的に作られたものと祖先の代に社会的に作られたものの遺伝による階級的定型なのである。生活が困難なため、成り上がり者の「実業家」と称する者たちが持っている裕福な姿もなく、運命の寵児である政治家らの持ついかめしいひげもない。皮膚は夏の暑さや風、雪に冒されて黒人のようになり、知識もなければ趣味もなく、高尚な道德観念もなく、一個の機械として運転するにすぎないので、骨格のような純粋な野蛮人である。このような彼らが、細い絹のような指と白バラのような頬を持った上層階級に恋心さえも起こさないのは当然である。イギリス王女⁷⁶らが道行く人に出会っても、色目を使う⁷⁷ことはできず、むやみに警官に叱られて、恐れをなして逃げるだろう。また、ドイツ皇帝が日本に漫遊し、皇帝の乗った馬車がたまたま坂道のある街⁷⁸に入る時があっても、「ちよいと、ちよいと」と呼んで招くことはできないのだ。美女と美男は全ての社会の若年層に恋される。ただ、彼ら下層階級の男女が上層階級の美しい者を見ても恋の苦痛がないのは、つまらない工夫が三井、岩崎になりたいと思う苦痛がないのと同じで、まさに絶望のためなのである。彼らは恋心を動かさないように、絶望をも意識しないのだろう。しかしながらそれと同じく、我々は どうしてこれほど飢えるのかという消極的自覚とともに、彼

著名で、本文に書いてあるようなことを述べているからである。

⁷⁴ 原文では「引力」だが、引力のままでは物理法則のようで変である。よって「引きつける力」とした。

⁷⁵ 白、黄、黒というのはわかるのだが、赤というのはわからない。

⁷⁶ この「イギリス王女」というのはよくわからない。イギリス女王の誤りなのか、ヴィクトリア女王の娘の意味なのか。

⁷⁷ 原文では「秋波を送る」である。これは「色目を使う」ことの意味。

⁷⁸ 何を指しているのかはわからないが、長崎のような街（坂道があって、異国情緒あふれる街）をイメージしているのだろう。

らはどうしてあれほど金持ちなのかという自覚が積極的に出てきている⁷⁹。我々の恋する男と女とが、どうして親に売られ、親に買われて、これほど恋の機会を失っているのかという消極的自覚とともに、彼らはどうしてあれほど美しく、醜い我々では恋することができないのかという積極的な自覚が来る。これが、革命が大胆で華麗な歩調によって地平線に現れる時であり、革命の成就とともにこうした意味での恋の絶望はなくなるだろう。敢えて美の面に限らず、社会の全分子は平等な物質的保護と自由な精神的開発によって、知識を好む者は知識の広い者を恋し、道徳を慕う者は道徳心の高い者を恋し、美貌を愛する者は美女、美男を恋する完全な自由を得るだろう。そして自由で競争者が多いため、男は男と、女は女との雌雄競争によって各々その真、善、美を進化させる。その進化した中で最も真を得て、善を持ち、美を持つ者が、真を得て、善を持ち、美を持っている異性を得て、その真、善、美を子孫に遺伝させ、それによって社会の理想を実現するだろう。つまり、広い意味での天才の世である。天の真を得た個性、天の善を持つ個性、天の美を持つ個性は、恋愛の中心となって社会全体の崇敬を集める世である。——ここまでに至ると、社会主義の極みであって、個人主義の理想と符合する。

個人主義の大潮流は、ローマ法王の絶対無限の権利を排除し、思想の自由を呼号することによって流れ始めた。社会の一分子であるにすぎないローマ法王が、全ての分子の上で真と善の決定権を持たないことは言うまでもなく、学説の一派である「国体論」に、個性の自由な発展を圧迫して思想界の上にローマ法王として君臨し、それが真とし、善とする所を強制する権利がないのも言うまでもないことである。「福神」がその醜い手を差し伸べて、男女の間を引き裂いたり、結びつけたりする神として、美の判決を出す権力についてもまた何者からも許されていない。全ての進化は生存競争である。生存競争の決定権はあらゆる進化の大権であり、キリストであっても持つてはいけないのだ。いかなる者が善を持って、真を得て、美を持って生存するかは、社会の全分子の多数決による他ない。そしてある時代に多数決で承認された真、善、美はその時代の真、善、美にすぎない。しかし、次の時代にはさらに次の時代の多数決によって真、善、美を決定するだろう。そして多数決の最も多数で偽りのない投票は、議会の討論によるのではなく、新聞紙の世論によるのではなく、また直接立法によるのでもない。社会の全分子を挙げての男女の理想とされる所である。ただ、今日の社会は階級的階層をなしているので、恋の理想は亭主となり、長芋となり、遊女となり、空に向いた鼻を持つ令夫人となっており、ひどく低級なものであるが、社会の進化とともに理想は進化し、階級が一掃されるとともに、理想は広く、高いものとなるだろう。社会の全分子である男女に平等な物質的保護と自由な精神的開発が拡張する時、——その時、若い男女がつなぐ手と手は、ローマ法王のような絶対無限の権力を持つだろう。これこそ、個人が絶対的に自由な世の中ではないか。社会の一分子である法王もしくは皇帝の意志によって真、善、美が決定されることへの怒りから巻き起こった個人主義というものは、むしろ社会主義の実現によって理想を実現されることになるだろう。だか

⁷⁹ 原文では「如く」と結んでいる。しかし、これではどうもすわりがよくないので、訳を整えた。

ら、我々は個人主義者を排しないし、また個人主義の思想を継承して社会主義者と称している今の社会革命家の多くを排しない。個人と社会は、小さな個体という点から見た時と大きな個体という点から見た時では立脚する所を異にする。社会主義の最終到達点では、社会の一部分である法王、皇帝らがその意志によって絶対的な自由に基づき、真、善、美を判決したように、社会の全部分である男女の意志によって全ての真、善、美を判決する自由を絶対的に得ることを理想とするからである。まさにプラトンが「部分は全体に先立たず、全部は部分に先立たない。」⁸⁰と言ったように、個人は社会の一部分であり、社会は個人の全体であるからなのだ。ただ、講壇社会主義と名付けるものに至っては、社会の進化を理解せず、何らの理想さえもない（前篇で、樋口氏が矢野氏の理想を「空想である」と言ったことなどがその例と言えよう）。一言で評すれば、盲動者がバラバラで集まっているだけなのだ。

個人主義の要求は、まさしく社会主義の下において満足を得ると言える。しかしながら、社会主義はあくまで社会主義であり、社会の生存進化が最終目標なのである。それならば、社会主義の実現によって社会はどう進化するのか。

8—3 社会主義によって実現される進化とはどんなものか

しかしながら、私はこの社会進化の将来について語るものの、その推理力はとても乏しく、筆も貧しい。私は時にある種の宗教的歓喜に全身の戦慄を覚える。ただ、私に最もありふれた科学者の態度を持たせ、最も近い将来の社会を想像させてほしい。——まず、貧困と犯罪はなくなる。生活の苦悩、苦しい戦いのせいで作られた残忍な良心と醜い容貌もなくなる。物質的文明の進化は社会全体に平等に普及し、さらに平等に普及した社会全体の精神的開発により、知識、芸術は大いに水準を高くする。経済的結婚と奴隷道徳はなくなり、社会の全分子は神のような独立を得て、個性の発展はほとんど絶対的に自由となる。自我の要求はそれ自身道徳的意義を持って社会の進化となり、社会性の発展は非倫理的な社会組織と道徳的義務の衝突がなく、不要な道徳となる。水準が高まることによって社会の全分子は天才の個性を理解する能力を開発され、天の真、善、美である男女は老いた社会の分子からは尊崇の対象となり、若い分子からは恋愛によって報酬を受ける。男子はその理想の真、善、美を持つ女子を得ようとして、ますます自身の真、善、美を磨き、女子もその理想の真、善、美を持つ男子を得ようとして、ますます自身の真、善、美を加える。そして社会の中において真、善、美の最も優れた個性が、雌雄競争によって子供にさらに優れた真、善、美を遺伝させて残される。また、遺伝によって加えられた真、善、美を持つ子供のさらに真、善、美において優れた個性が、雌雄競争によってまたさらに真、善、美を加え、またさらにこれを遺伝させていく。

ああ、「類神人」はこの累積してやまない真、善、美の遺伝によって、ついに何者に進化しようとするのだろうか。生物学によれば、本能とは遺伝の累積であり、単細胞生物から

⁸⁰ 『パルメニデス』において、全体と部分の関係について論じている。このことであろうか。

無数の種族に進化して、それぞれの本能があるのはまさしく遺伝の累積であるということである。だから、「類神人」が男女の愛の競争を完全に行うことによって、今日の理想とする神を遺伝の累積によって実現できる時が来たならば、ここで人類は消滅して「神類」の世が成立するであろう。そして人類がサル属とその種族を異にして本能を異にするように、人類と本能の異なる神類は、神類の生物学者によって「種族を異にする最も進化した生物」としてされることだろう。

8—4 道徳の進化

第一に想像できる本能の変化は「善」の上に来る。つまり、社会主義の実現後二、三代（つまり一世紀のうち）で道徳は本能化するだろう。ある倫理学者によれば、道徳的行為とは苦痛に打ち勝つという「克己」⁸¹の精神にあつて、本能に従い、もしくは快樂に導かれてする行為は少なくとも非道徳的であると言う。もちろん、個人主義の倫理学としてこの説明を上回るものはないが、この説明は、人類がアメーバのように分裂した大きな個体としての社会的存在であることを理解しないことから来る価値のない説明である。もし、我々が自己に不利なことを目的としたり、不快な導きによって一つの行為でもするというのならば、生物界を離れた奇異な動物と言うべきである。つまり、生物とは別の神の子であるという天地創造説の仮定を取り入れなければ、理解できない議論なのである。道徳的行為とは、社会の生存進化のために要求された社会性の発動である。生物学の発達以前において、個体を説明する見解が単に空間を隔てた動物とか、一つの卵から成長した生物とかいうような漠然とした考え以外の何者でもなかった時代においては、この小さな我そのものを一つの個体と考えた。そのため、大きな個体の分子としての社会的利己心により、小さな個体としての個人的利己心が圧迫される時、利己心の小さなものを感じる苦痛と不利だけを見て、その行為が実は苦痛と不利に打ち勝って働く社会性の満足によって快樂と利益を得ていることを理解していなかったのである。もし、克己の努力によって初めて道徳的評価をつけられるならば、好んで妻を愛し、社会国家を愛することなどは道徳的行為とされる価値がないだろう。また、母が自身の身よりも子を愛することは苦痛によるのではなく、また克己によるのでもなく、努力によるのではないから、少しも道徳的であると言われる理由がない。そしてまた、君子⁸²のいわゆる「七十になると、思うままに行動しても決まりを外れることがない」⁸³とすることなどは、習慣化した道徳的行為は苦痛も、努力も、克己もないようになるので、習慣化していない時代よりも大いに道徳的価値を下落させることになるはずである。祖先の遺伝によって道徳的傾向を継承した者の行為などは、全く努力がないので、市場における道徳的価値は無価値だと論じなければならない。けれど、これはマルクスの価値論の誤謬と同じであり、我々は天然の生産物であってもその価値自

81 「克己」とは、己に打ち勝つこと。

82 原文は「君主」で、〔君子カ〕と注記されている。後に『論語』の引用とおぼしき文があるので、指摘の通り「君子」とすべきだろう。よって本文では直して訳した。ちなみに、「君子」とは、人格が立派な人。

83 『論語』卷第二為政篇にある。

身に代価を払っているように、いわゆる天性の非凡な姿などは最も尊重されるものではないか。——しかしながら、いかに価値のあるものも空気のように広く存在すれば価値はない。価値が少なくても需要に応じられない少数のものは、もともとの価値以上の価値を表わす。今日「道徳」が無限の価値を表わしているのは、それに対する要求がとて多いに、天然の生産物として存在する天性の聖人⁸⁴がダイヤモンドよりも少なく、また非倫理的な社会組織の中においては無意味な努力が多く、人工の宝石が得られないためである。人は個人の立脚点から見て利己心を持っているとともに、社会の立脚点から見て社会的利己心を持っている。だから、あの自由意思論とか、決定論とかいうものは、顕微鏡が発明されて以後の個体の科学的基礎から考えれば、少しも論争すべきことではない。自由意思論は、意思の自由とは最も強い内心の必然であるとする点において決定論と合致し、決定論もまた同じで、意思の必然とは最も強い内心の自由によるのだとする点において自由意思論と合致するからである。つまり、我々が道徳を行うのは、最も強い内心の必然に駆られたからであり、我々が罪悪を犯すのは最も強い内心の自由に従っているからである。人は内心において社会性と個性を持っている。内心で社会性が最も盛んに働き、他方の個性を抑圧して働く時には、人はその最も強い社会性の必然に駆られ、道徳を実践する。社会性はここに自由を感じて自由意思論となる。しかしながら、圧迫された個性はその自由を失うので、この意味において決定論となる。これと同じく、その内心において個性が最も盛んに働き、他方の社会性を抑圧して現れる時には、人は最も強い個性の自由に打ち負かされ、社会性は必然を感じて決定論となる。しかしながら、打ち勝った個性は自由を得たため、この意味において自由意思論となるのだ。ただ、決定論を「人類の上に存在する神の命ずる所に従って志を持つ」という意味の古代宗教の宿命論として唱え、自由意思論をルター以後⁸⁵に現れた個人主義の独断のように、「人は先天的に自由な意思を持っている」という意味で唱えることが誤っていることは言うまでもない。そしてこの社会性と個性は、その強弱の度において各個人によって先天的に異なるだけでなく、今日のような雲泥の差がある社会組織の下においては、階級的等級に従って後天的に雲泥のように異なる。先天的に盛んな社会性を持つ者、つまり祖先の社会的環境によって盛んにされた社会性を遺伝で継承した者、もしくは後天的に教育のある階級の空気によって盛んにされた社会性を有する者は、その盛んな社会性の必然に駆られる意思の自由によって簡単に道徳を行う。けれど、今日においてこうした例は、夜明け前の空に残る星よりも乏しい。それどころか、社会の大多数は先天的に、つまり祖先の社会的環境の遺伝によってひどく弱々しい社会性しか持っておらず、また後天的に私利私欲によってもっぱら戦いに明け暮れている各々の階級に育てられているので、個性だけが強烈さを極めて、その盛んな個性の自由に打ち負かされて必然的に犯罪者となる。そうでない者は次第に抵抗できるようになり、生き残っ

⁸⁴ 原文では「聖の天なる者」となっているが、意味がわかりにくい。よって意識をした。

⁸⁵ もっとも、ルター自身は自由意思を否定する。自由意思を認めたピコ＝デラ＝ミランドラと論争を交わしたことは有名である。

た社会性を大きな努力によって維持するが、それによってわずかに犯罪をしなければよいという一般の消極的善人となるにとどまる。道徳とは、社会性が我々に社会の分子として社会の生存進化のために活動することを要求するものなのである。だから、我々が我々自身を社会の一分子として（小我を目的としてではなく）より高くしようと努力することは十分に道徳的行為である。それとともに、多くは他の分子もしくは将来の分子のために、つまり大我のために小さな我を捨てて行動することをより多く道徳的行為として要求される。あの大我の生存進化を無視して、小我の名誉、栄達を求める行為が不道徳とされるだけでなく、小我の利益そのものを目的とした（社会の一分子としてではない）行為が、たとえたまたま社会の利益となることがあっても、一般に道徳的行為とされないのはこのためである。——まさに、現代社会は法律上も社会主義を理想としているものと言う他ない。それなのに社会の現実、個人主義とその根底をなす私有財産制度のせいで、事実上経済的貴族国となり、個人の私有する財産はなく、したがって個人主義も消え去ろうとしている。しかし、個人の全ての努力は多くの私有財産を獲得し、多くの自由を個人その者の利益のために待望されている状態である。我が日本などは、ヨーロッパの大革命のように、一挙に国家万能、社会専制の偏局的社会主義を打破し、個人の權威を絶対的に要求していない。そのため、維新革命とは言ってもあまり徹底されたものではないので、個人の自由・独立のために国家、社会が手段として存在するかのように考える機械的社会観が、ヨーロッパのように全ての法律、道徳の上に規定されていない。したがって、国家が法律によって強制しているものも、社会が道徳によって要求しているものも——偏局的社会主義を継承して個人の權威を無視することは、社会主義の許容しない所であるにもかかわらず——、社会性を最高權威としている点において、社会主義の理想をおぼろげながらも期待しているものだと言えるのだ（だから、欧米において土地、資本の公有を唱えることは、個人主義によって建てられた法律から見ると、秩序を乱す可能性があるのだが、国家万能の偏局的社会主義を継承する日本の法律から見れば、それを唱えたことを法律に反するとして処罰する理由がない。したがって、あの社会主義者と称して個人主義の自由・平等論を唱える者が国家そのものの否定を公言することに対して、日本の法律には処罰する権利があり、欧米の法律には秩序を乱すという理由で圧迫する理由がない）。しかしながら、日本の法律が偏局的社会主義を継承するといっても、単に国家が最高の所有権者となることを法律の理想において表白するにとどまり、事実上は個人主義を産む私有財産制度を採用している。もちろん、極度まで主張された個人主義の欧米でも、理論で事実を左右することができない。引力がなければ天体の秩序が保たれないように、社会性がなければ社会、国家が一日も存在することができないことは言うまでもない。日本においても維新革命とともに個人が私有財産権の主体となり、明治六年の地租条例においてさらに国家の最高の所有権の下に土地所有権を得て、個人主義の根底を築いたにもかかわらず、なお「愛国」の声において中世的で野蛮な気風である社会性が呼び起こされている。ただ、その社会性も微々たるものであり、私有財産制度の個人主義的社会組織によって圧迫され破壊され、個性だけが

周囲の個人主義的空気の中で呼吸し、個人主義的思想を持つ階級に育てられている。それによって枝を張り、根を広げてしっかりと定着し、抜くことができないほどの大木となったのである。このように、個性だけが生き残り、社会性の芽が出るとすぐに摘み取られるような社会組織の下において、社会性は摘み取られて個性だけが盛んになった我々が、個性の必然に駆られて犯罪を犯し、もしくは大きな努力と克己によって辛うじて犯罪をしなければよいと考える消極的善人となって満足する他ないことは言うまでもないのである。

今の法律、道徳の理想が社会主義によって実現された世ではそうはならない。道徳を果たすのに努力はいらないし、克己もいらない。人はことごとく社会性の自由に従って、必然的に道徳に従う。だから、道徳的行為は克己と努力によってできるとするならば、社会主義の世には道徳家と称される者はおらず、道徳が最も必要なものであるにもかかわらず、人はそれを空気のように無価値なものと感じるだろう。——こう見ると、社会主義の世を道徳世界と言うことも間違いではなく、無道徳の世と言うことも可能である。今日においても、盗賊と貧困者にとっては「殺さない」、「盗まない」ということが大きな努力と克己によってようやく達することができる道徳であるにもかかわらず、一定の収入とぐらつかい心がある者にとっては、単にそれだけのことであって、何ら尊いことを加えない普通の無意識的なことではないか。今日のように、黄金と権力による社会組織においてこそ、けちではないとか、賄賂をもらわないとか、買収されないとか、権力を濫用しないとかいうにすぎない消極的な道徳行為も、それをするだけで器の大きい実業家とか、清廉な官僚とか、高潔な議員とか、賢明な大臣と言われるのだ。けれどこう言われるのは、大きな努力と克己によって不徳に抵抗することのできたわずかな人格者にすぎず、たくさん要求されながらも非常に少ないダイヤモンドのようなので、きらめきを放っているのである。しかしながら、黄金と権力で作られた社会組織がなくなった社会主義の世においては、あたかも盗賊と貧困者が大きな努力と克己でようやく達する「殺さない」、「盗まない」という道徳のように、さほど価値のない平凡なことになる。全ての個人は社会に経済的従属関係を持っているので、大我そのものの一分子であることを意識して献身的な道徳が生まれる（第二篇『社会主義の倫理的理想』及び第四篇『いわゆる国体論の復古的革命主義』において経済と道徳、法律の関係を説いた所を見よ）。社会は社会性が自由に活動するように、社会の利益を目的として全ての制度を組織している。そのため、社会性が個性に圧迫されて、その自由の束縛を感じることなく、個性は個性として、個人自身が社会の一分子としての発展のために自由を尊重され、自我の発展それ自身が道徳的意義を持つことになるだろう。このようであるならば、自由意思論も決定論も無用の議論となり、各人が自分の好きなように行うことそれ自身が道徳的行為となるだろう。——そして好き勝手な行動が全て道徳的行為ならば、これはまさに無道徳の世である。そしてさらに、社会性を育てる社会組織によって盛んにされた社会性は、雌雄競争によって累積されて遺伝し、さらに強い社会的本能となる。本能とは遺伝の累積のである。つまり、後天的な社会的環境によって盛んにされた社会性は、その社会的環境による強靱さを遺伝させ、先天的に盛んな社会性を持つ

た、いわゆる天性のものになる。もし、この道德の本能化を否定する者がいるならば、まさしくその者は天地創造説を信じる者であって、ダーウィン以後の人ではない。天地が始まってから各々の生物種族がそれぞれはっきりと区別されて存在していたという思想でなければ、本能が固定的であると今日主張することができないからである。言い換えれば、各々の生物種族が各々本能を異にして、それぞれの階級の形成しているのは、それぞれの生物種族の環境による種族的経験が遺伝的に累積したのであり、人類の本能が今日のようなのは、類人猿以後の種族としての経験を遺伝によって累積したからである。人類の今後の進化さえも想像できない今の生物進化論者にとっては、人類の本能が今後どう変化するかを推論することに困難を感じるだろう。けれど、このことによって、進化論者が人類を「天地が始まった時から固定的に創造された」と考える者と同じだと考えてはいけない。同じように、遺伝の累積によって作られた今日の本能を固定的に考えることは純粋な天地創造説である。そうではないのだ！ 生物進化論の供給する無数の材料は、我々に道德の本能化が社会主義が実現してから二、三代後に実現すると断言させるのだ！ あの人為的な淘汰によって、二、三代で全く異なる種族を作ることは、この本能の変化が容易であるからである。野生のカモからアヒルを作る時、二、三代のうちには飛び去ろうとする野生のカモの本能があるが、ついには環境の力により、完全に本能の異なったアヒルとして作り上げられることなどは著しい事実である。もし、こうした明白な事実を他の生物種族において観察できるのならば、同じ生物種族の一つである我々人類の本能が、社会主義の環境によって二、三代の後に社会性の盛んな本能に変化することを疑う必要があるか。我々は信じている。今日我々のような特殊に盛んな小我の利己心を持っているのは、同じく本能の変化であり、原人時代から私有財産制（もちろん、この私有財産制とは、個人主義の革命以後のように、個人全てが財産権の主体となるものではなく、国王あるいは貴族らの私有のことである。このことはさらに後に説く）の有史時代に入るまでの九万五千年間は堯、舜などの「自然のままに人民を治められる」という道德世界として盛んな社会性を持っていたであろうと。この例として他の生物種族のものを挙げよう。例えば豚などは、人に家畜として育てられ、野生のイノシシの本能を失っているが、これを野に放って二、三代経てば、また野生の環境に適応する本能を得て再び野生のイノシシとなるという。まさに、我々は無限の喜びをもって信じる。今日の盛んな利己的本能は、人類の進化の一過程であり、社会主義の世に進化するならば、——あたかも野生のカモがアヒルとなり、豚が野生のイノシシに戻るように——その環境に適応する盛んな社会的本能を持つようになるだろうと。そしてその時代こそ、花のつぼみであった堯、舜の世の社会性が咲き乱れた桜花として開花する神の時代なのだ。

8—5 知識の進化

さらに、「真」の面でも進化するだろう。我々はここで、さらに生物学の上から独断的不平等論を打破し、完全にその呼吸をとめなければならぬ。我々はしばしば「人はただ社

会が存在することによってのみ人となる」というベルゲマンの語を引用し、『社会主義の倫理的理想』においては下層階級が非常に低級な階級的善にとどまっている理由を説いた。また、本編において野蛮人が野蛮人として作られる理由を説いた。我々はそこからさらに進んで断言しよう。——「人類はカンガルーと等しい有袋動物⁸⁶である」と。これは決して比喻ではない。生物学上の厳粛な事実として人類はまさにカンガルーと少しも異ならない有袋動物なのだ。誰もが知っているように、カンガルーの赤子は一吋ほどの大きさで、一週間で母の体外に出してから母の袋に入る。そしてそれから九ヶ月間母の袋の中で育てられ、それで初めて完全なカンガルーとして独立する。他の胎生動物にはこの袋が母の内部にあって、その子は出生までのほぼ九ヶ月を体内の袋で送って出てくるのに反し、カンガルーはその袋が母の体外にあるため、赤子は体外の袋で九ヶ月を送るのである。独断的不平等論は一吋のカンガルーと九ヶ月後のカンガルーを比較し、もともとカンガルーは不平等なのだと論じているのではないか。——産まれたまま人は一吋の大きさで、一週間で世に出たカンガルーである。少なくとも二十歳までを社会という袋の中で教育され、初めて独立したカンガルーとして世の中で立つことができるのである。生物学の高貴な教訓を見よ。それは、教育とは生殖作用の一部（欠損を補うというよりもまさに一部）であるということである。他の胎生動物が体内で完成する九ヶ月の生殖作用を体外で行うカンガルーにとっては、体外の九ヶ月が生殖作用の一部であるように、二十歳までの教育期間は人類にとっては社会という母の体外の袋で育てられるべき生殖作用の一部なのだ。下等な階級の生物に至っては、分娩そのもので生殖作用は完成されるので、分娩後は全く教育しなくとも完全な一生物として独立する。それなのに、高等な生物に至っては分娩だけでは生殖作用が完成されないので、教育という生殖作用をする。例えば、猫などは絶えず尾を素早く振って、小猫にこれを捕まえることに慣れさせ、ネズミ取りの教育をする。虎は噛み殺した動物の頭に子供の虎の小さな歯形を付けさせて、えさを捕まえることを教育することはそれと同じである。それならば、最も高い階級の人類において、最も長い間の綿密で精練な教育が必要なのは、不完全を極めた生殖作用の一部として不可欠で重大な生殖作用だからである。現在のように、ほとんど教育されていない下層階級を六千年の知識で満たされた袋で育てられた上層階級と比較するのは、ほとんど人の形をしていない胎児と分娩後の子供を比較するような理論のないものである。人類は分娩までの九ヶ月で人類に至るまでの進化の歴史を経験し、分娩後から二十歳に至るまでの間でさらに原人時代からの十万年にわたる進化の歴史を経験する。もし胎児と子供を比較して、一方は獣の時代であり、他方は人類の時代であることを忘れていないのならば、両者を比較するなどということはあり得ないはずである。それなのに、原人の野蛮時代と十万年後の文明時代を比較して不平等

⁸⁶ ほ乳類の一種なので、現在では「有袋類」という呼び名を使う。カンガルーはその典型であるが、コアラもその中に入る。現在はオーストラリア、ニューギニア、南アメリカにのみ生息している。ほ乳類は一般に胎生動物と言われ、胎内で十分育ててから産むのに対し、有袋類は胎内で育てずに体外で育てる。そのため、胎生動物よりも弱い。そのため、かつては各地にいたと考えられているが、他の地域では胎生動物に駆逐されていき、姿を消したのだと言われている。

論を説くとは何事か⁸⁷。まさに今の下層階級は数百、数千年前の知的水準にとどまっているため、哀れむべき学者らから「人はもともと不平等なのだ」と言われているのである。そしてこのような不平等論は一切の時間を無視し、二十世紀の子供が蒸気と電気を理解することから、その子らをプラトン、アリストテレスの上に置き、六千年の歴史の遠い古代に不平等論をさかのぼらせるものに他ならない。分娩された状態のままではいけなくて、教育されるべきなのは言うまでもない。しかしながら、小猫がネズミを捕まえるのと同じ食物を得るという目的以外にも、人類が文明時代として受ける十万年間の知識の累積の袋に入らなければ、決して文明人として完成された分娩とは言えない。また、知識の教育を受けないとは言わないが、辛うじて宮本武蔵の武勇伝⁸⁸を書いた講談物を読める知識しかない者と、三十歳まで古今内外の累積した知識で育てられた者とは、生殖作用の完全な程度において、あたかもカンガルーの袋から三週間で取り出したものと九ヶ月後に出たものと同じぐらいの格差があると記憶しなければならない（だから、階級的格差がある現在において全ての知識が階級的真となる。今なおフランス革命時代の独断的平等論を継承している無知な階級も、また階級的格差があるせいで誤った知識で育てられたことによって独断的不平等論を掲げて他を軽んじる今の学者階級も、袋が異なることから生じた変種のカンガルーであると言えよう）。生殖作用を娯楽として取り扱っている者にとっては、教育が生殖作用の一部であるということなどは理解が難しいであろう。しかしながら、生物哲学の上から見る時においては、生殖作用は種族的経験、知識を肉体において——つまり本能として——遺伝させる方法である。教育とは本能の上に社会的に遺伝した六千年の経験、知識を精神において遺伝させる方法である。だから、明かりの薄暗い⁸⁹寝室は一夜で十万年の課目を教育する講壇であり、独身のキリストが野に立つて行う教え⁹⁰は、千九百年間の子孫が父と仰ぐように、数限りない子を産んだ大いなる生殖作用である。家庭も学校である。図書館も寝室である。論語も恋の言葉である。紅の筆で書いた手紙⁹¹も聖書である。社会全てが産婦の寝床である。

社会主義の要求は、社会の全分子が四畳半の部屋や待合茶屋のような講壇を去り、『論語』と聖書を恋の言葉として、また恋文として社会の産婦の寝床において産声を挙げることを第一とする。そしてこれは、社会の全分子である全ての個人が平等に必要とする点において、個人の権威を絶対的に認める個人主義と合致する。社会主義が清貧に停滞する下層的

⁸⁷ 原文は「若し、胎児と小児とを比較して不平等論を唱へ—は獣類時代にして—は人類時代なることを忘却せざるならば、原人の野蛮時代と十万年後文明時代とを比較して不平等論を説くとは何事ぞ。」となっている。言いたいことはわかるのだが、前半の「胎児と小児とを比較して不平等論を唱へ…」の「不平等論を唱え」が不要である。これがあるためにかえって意味がわからなくなっている。

⁸⁸ 原文は「宮本武勇伝」となっていて、名を挙げていないが、武勇伝の有名な宮本と言えば宮本武蔵しかいない。ちなみに、原文はその後に「講談」と続けているが、「講談」というのは話芸のことだから妙ではある。「講談物」とでも訳すしかない。

⁸⁹ 原文は「蘭燈影暗き」となっている。「蘭燈」とは石の塔のことだが、ここでそう訳すと意味がわからなくなる。よって意識を試みた。

⁹⁰ おそらく「山上の垂訓」のことを指しているのだろう。

⁹¹ 紅の筆は女性用の筆のことで、それが転じて「恋文」のことを表す。

平等と理解されるため、また社会主義者の多くが単に皇帝を打倒し、貴族を打破して平民階級にまで上層階級を引き下げればよいかのように考えて「平民主義」の命名さえも生じさせるようになったため、古来の大皇帝もしくは剛健な貴族らが振るっている個性の権威を無視するかのようには誤って捉えられ、劣敗者が泣き叫んでいるかのようにむやみに受け取られる。もし社会主義がこのようなものだとするならば、私は今走せているこの筆を折り、むしろ君主主義、貴族主義を唱えろと言おう。個性の権威は単に多数だという理由だけで犯してはいけない。社会主義は「最大多数の最大幸福」⁹²というものではない。神聖、不可侵である絶対無限の権力を持つ皇帝が、その個性の権威で社会全体にあたる大多数を抑圧したぐらいの「個人の自由」のない状況で、どんな社会主義があろうか。しかしながら、社会の進化は全てのことに直ちには全分子に及ばない。そのため、個人の自由については、まずその一分子である皇帝だけを進化させて君主国となり、さらその進化を少数分子に拡張させ、貴族階級にも個人の自由が及んで貴族国となった。貴族らは武士、農奴の上に君主として（彼らは皇帝と等しく君主であった）絶対的な自由を持ち、他の自由を得た無数の君主らと権威が衝突する場合には、力による決定が待っていた（いかに貴族国時代において、この個人の自由が力の強さによって決定されていたかは、後に説く『いわゆる国体論の復古的革命主義』において日本の例を示す。よって、そこを見よ）。日本の皇帝は有史に入ってから、その強大な力によって絶対的な自由を個人の権威において表白した。貴族階級である諸侯の多くの君主（皇室も君主であった）は、また等しく強大な力によって自由の衝突を決定し、強大な力が他の力を圧倒して働く時には、絶対無限の自由を振るい、他の多くの君主の頭上に白い刃を光らせた（そして皇室も君主であった）のだ。このように、「個人の権威のためには、いかに多数であっても敵として敢然と立ち向かえ」という自由主義は、まさに社会が君主国時代からの理想として掲げたものである。社会主義が社会進化の理法に背いて唱えられる時、思想界では「空想」という乱れ矢を浴びて戦死し、現実の世界では暴民の動乱としてたちまち鎮圧される。社会の一分子が金の冠の下で輝く目を光らせて社会の大多数を威圧した時は、個人の権威は絶対無限の権力だという理想がまず社会の一分子によって実現された時なのである。社会進化は下層階級が上層階級を理想として到達しようとする模倣による（タルド⁹³の模倣説は、倫理学において同じ説明をしているもので、合致している所があるとおり、全て当たっている）。そしてタルドが言ったように、模倣の結果は平等を得ることにある。貴族階級である諸侯らは平等観を血ぬられた刃に掲げ、君主と同じ個人の絶対的自由を得ようとして模倣し始めた。その最高の権威を示す天下を取ろうという理想は、富のためではなく、名声のためでもなく、自己の自由を妨げる全ての者を抑圧し、個人の権威を主張するためだけにあるのだ！そしてそれらの君主の中でその理想を実現できる強大な力を持っていた者は、ある時代には後

⁹² これは、功利主義哲学者ジェレミー・ベンサム有名な公式である。“The greatest happiness of the greatest number”の訳語。

⁹³ フランスの社会学者。社会の原動力を模倣に求めた。

醍醐天皇となって他の君主である北条氏を滅ぼし、ある時代には徳川氏となって他の君主である多くの天皇、諸侯らに圧迫を加え、それによってその個人の権威を社会全体の上に振るった。力の乏しかった諸侯階級の君主らは、武士、農奴という下級層に向かって自由を絶対的に発現した。社会の進化は平等観の拡張にある。個人の権威が、初めは社会の一分子だけに実現されていたことから平等観の拡張によって少数の分子にその実現を及ぼした。そしてさらに平等観を社会全体の分子に拡張させ、ここにフランス革命が起こり、維新革命が起こり、「個人の自由は他のいかなる人であっても犯すことができない」と主張する民主主義の世となった。だから、現在の法律はまさに社会民主主義を表しているのである。個人の利益のために他の個人は犠牲にされてはいけないという民主主義とともに、その個人が犠牲となる場合は社会の利益となる時である。犠牲を要求する者は個人であるが（軍隊の長官、裁判官など）、それは個人としてではなく、国家の利益を主張する国家の代表者として行うのである。だから、法律の理想はまさに社会民主主義なのだ。ただ、経済的貴族国となっているため、他種族との生存競争、社会単位の生存競争の中で、貧困と戦争による劣敗者を出しているため、全人類は未だ生物界の上に君主となり、貴族となることができないでいる。我々は繰り返して断言する。社会主義は、君主を打倒し、貴族を打破して上層階級を下層的平等の内に溶解させる「平民主義」ではない。かつての君主国時代の一分子が実現した個人の絶対的権威を社会の全分子に実現させようとするところにある。今の法律を見よ。徳川時代の平民はおらず、戦国時代の貴族もおらず、雄略、仁徳天皇時代の君主もいない。ただ、国家と国民（天皇も広義の国民である）がいるだけである。そして国家は大きな個体の点から見られるために社会主義を体現する。国民は小さな個体の立脚点から考えられた故に民主主義と体現する（なお、『いわゆる国体論の復古的革命主義』を見よ）。

8—6 社会主義を平民主義と考えることの誤り

この説明を理解するならば、社会主義は、アテネ市民がソクラテスに対してしたように、愚かな民衆が多数を頼んで天才を圧迫するものになるだろうとの非難は理由がないとわかるだろう。——社会主義は天才主義である。しかも社会全体の天才主義である（だから、我々は今の社会主義者のある者が「凡人社」⁹⁴と名付けたものを「天才社」に変えることを望む。先駆者たちは決して凡人ではない）。天才とは、愚かな民衆の圧迫に打ち勝って個性の変異を発揮できた権威のある個人である。だから、天才の多くは愚かな民衆を排し、個人の権威を振るう大きな意志を持つ君主、貴族（もちろん、数代の後には退化し、他の権威に変わられるが）と、その君主貴族に対して個人の権威を主張した大いなる頭脳の下に近づいた。しかしながら、過去の天才はその個性の変異を発揮するために個人の権威を無視する狭苦しい社会の良心と戦うことで、その大いなる意志と大いなる頭脳は個性の発揮

⁹⁴ 原文がこうなっているのでそのままにしたが、これは「平民社」のことである。なぜ「凡人社」としたのかはわからない。

よりも、発揮を自由にしようとする努力によって多くを消耗されていた。しかし、社会主義の世はそうはならない。古代の君主国には一分子が実現して示したほどの絶対無限の個人の自由が社会の全分子にまで拡張して実現されるので、天才は自由そのもののために努力する必要がなく、全ての努力は与えられた個性の発揮に注がれる。まさに天才の種は無数に地に落ちているのだ。けれど今日までの世は、天才が育てられる自由のある肥沃な土地ではなかったため、多くは無名の英雄として朽ち果てていった。そうでなければ、土の質を異にした階級にまかれ、多くは形のゆがんだ天才となり、与えられた一部もしくは変質した部分を発揮するにとどまる。——社会主義は、まず天才が発展する自由のある肥沃な土地である点において天才主義である。そしてさらに天才を育てる豊富な肥料もあるので、ますます天才主義であると言える。全ての種子にとって発育を自由にできなくする妨害があってはいけないとともに、発育するための肥料が必要である。天才とは社会から肥料を吸収して開花し、よい香りを漂わせる花なのだ。大詩人であっても、野蛮な村落に置けば、十歳の児童の持っているようなわずかな言語しか得られない。それで何を歌えようか。思想の根も既に存在する社会に材料を取り、天地を見る目も社会という母の手によって開かれるのである。偉大な釈迦をバラモン⁹⁵の哲学と衣食に不自由のないインドに生まれさせず、一生を氷や雪の下であくせく働くことで過ごし、哲学の芽もないエスキモーの村落に置けば、小さな偶像教の開祖であるにすぎないだろう。キリストに未だ世界的な洞察力がなく、ただ学者とパリサイ人を相手にしていたのは、ユダヤ以外には足跡にも及ばなかったためである。パウロ⁹⁶によって初めて世界に氾濫する思想となったのは、キリストの思想を抱いて、世界に翼を張っていたローマに入ったからである。義経が鴨越⁹⁷の武将であるにすぎないのは、個性を発揮する環境が一島国でしかなかったためである。ハンニバル⁹⁸のアルプス越えはその舞台が大陸であるために世界的に有名になったのである。「朕」と称する笑いたくなるようなドイツ皇帝が、一度全地球上の君主になろうという夢想を抱いたのは、時代が十九世紀であったためである。カエサル⁹⁹がいかに偉大であっても、地中海沿岸を征服して¹⁰⁰世界はここで尽きたとして満足するしかなかった。コロンブスが地球は丸いという意見を述べた時、当時の学者らはたちまちそれを論破し、「それならば、我々の

95 原文では「波羅門」である。本来は「婆羅門」であろうが、バラモンのことである。

96 原文では「ポーロ」となっているが、ラテン語読みに変更する。

97 一ノ谷の合戦の際に、義経が平家襲撃のために進んだ難所。この鴨越を果たした義経が崖から駆け下りて平家を襲撃したことはあまりにも有名である。

98 ハンニバルはカルタゴの名将(B.C.二四七～B.C.一八三)。当時カルタゴの植民地であったスペインから軍を率いて、当時超えるのは不可能とされていたアルプスを越えてローマに侵入した。騎兵を機動的に駆使した戦術でローマ軍を度々破り、十六年近くイタリア半島に居座ってローマを苦しめた。ただ、ファビウスらが消耗戦を展開してからはハンニバルに戦を仕掛けなくなり、後半期にははかばかしい成果を上げられなかった。最後はカルタゴのザマの決戦でスキピオに敗れた。

99 原文は、「シーザー」となっている。現在も英語読みが浸透しているので、本来変更は必要ないのだが、「シセロ」(著作集一〇六頁)をラテン語読みの「キケロ」に変更したのに、「シーザー」を変更しないのでは座りが悪い。よって、「カエサル」に変更する。

100 カエサルは元老院と対立を深め、ガリア遠征後、元老院から独裁官に任じられたポンペイウスと全面対決した(ローマの内乱)。ポンペイウス派はカエサルに敗れてから、イタリア半島を逃れ、地中海沿岸の都市で勢力の立て直しを図ったため、地中海沿岸を両派が取り合うことになった。最終的にカエサルが勝利した。

足下にあたる世界の裏は草木も逆さまに生えていて、人類、鳥、獣は皆奈落の底に落ちていくことになる。」と言いつ争った。けれど、これは引力説がなかった時代に生まれたためであり、その多くの中には卓越した個性もあったであろうに、電信と鉄道で少女がお手玉を縫うように地球をもてあそぶのを見る今日の小学生にも劣っていたのである。大建築には多くの材料を必要とする。いかなる天才といえども、思想上の大建築をするにはその材料となる思想をまず社会から吸収しなければ、その建築的個性を示すことができない。そしてまた大建築には先人の建築術を見る必要がある。南太平洋の原住民の村落に二十階の家屋は建たない。ギリシャ・ローマの建築術、中世キリスト教の教会、インドシナの仏教寺院が歴史的発達を有すると言うのはこのことを示しているのもであって、今日の天文学は十進法のない原人の村落から伝わったものではない。アリストテレスの演繹法だけで今日の科学研究が興ったのではない。天才とは、その時代までの社会的遺伝の知識つまり社会精神を一度一身に吸入し、吸入した材料を特異な構成力によって自己特有の模型として作り上げ、後代の社会精神として社会の上に放射する。全ての天才がその思想において時代に制約された色彩を帯びるというのはこれによる。哲学史が連鎖した思想体系によって編まれるのもこのためである。天才が社会的生物であるというのは完全な真理ではないが、天才が社会の土と肥料によって育てられた花であるということは動かせない事実である。それなのに、人類の今日までの歴史はどうであろうか。天才の種は植物の種子が風に吹かれるように人の世に落ちて、自由のない、石が多くてやせた土地であったために芽が出ず、芽生えたものも君主、貴族という馬のひづめによって踏みにじられた。そしてそのわずかな種子が自由を得た上層階級に落ち、もしくは上層階級の手によって自由のある土地に移し植えられても、社会の進化していない時代には肥料が貧しいため、開花した花も多くの野花にすぎない。このようであるならば、歴史上の天才というものが己の考えがまさに百代の後に受け入れられることを望むのは言うまでもないが、その光も時代を隔てるにつれてかすかになって消えゆくのである。昔の人も今の人も母体を出る時は同じ原始人である。天才も原始人の村落において原始人の天才となる個体の変異である。ただ、社会の寝室において社会的に累積した知識を遺伝させられる生殖作用によって、昔の人は昔の人となり、今の子は今の子となる。キリストは天国を示すのに、遠い星の彼方を指した。しかしながら、彼よりも知識のある今日の我々は、近い将来の地球に楽園があることを認めて、歩を進めている。釈迦は座禅¹⁰¹を組んで修行に励んだが、宇宙循環説の域を出ることができなかった。しかしながら、彼よりも研究の蓄積した今日の我々は、宇宙、人生が進化していることを明らかに理解できている。アリストテレスは明哲であった。しかしながら、我々から見れば神童であるが、その域を出るものではない。ダーウィンは生物進化論の大成者となったようである。しかしながら彼の遺伝を受け、白ひげの彼よりも年老いた

¹⁰¹ 原文では、「結跏趺坐」となっているが、「跏」では意味が通じない。「跏」は「跏」の誤りであろう。直すと、「結跏趺坐」となり意味が通じる。よって、それに改めて訳した。

我々は二十三歳¹⁰²にして彼以上の思想を持っている。ああ、このように無限に累積し、果てしなく遺伝してやまない「類神人」の真理よ！ 個性は社会精神を特殊なものにするものであり、社会は特殊なものになった個性の精神を受け取って普遍的なものにし、それを社会の精神として後代に遺伝させるのだ。そして個性が社会精神を特殊にしようとして吸収することは、社会が遺伝によって普遍的に存在させている、先代が作り上げた無数の個性の精神を吸収するということなのである。社会と個人というのは、単に大我と小我という立脚点の違いなのだ。それならば、どうして個人の自由を絶対的に尊重する社会主義を愚かな民衆を万能視する主義と理解するのだろうか。社会主義が物質的保護の平等とともに、精神的開発の普及を無上の要求としているのは、いかなる天才の個性でも、社会の水準があまりにも下級ではその特殊な精神も貧しくなり、またその精神を受け取って後代に遺伝させる社会精神とすることができなくなるため、天才が無名のまま朽ちてゆくとともに社会の進化が遅々として進まないからである。くれぐれも知るべきなのは、社会主義と個人主義の理想の合致である。社会全分子（つまり全ての個人）のあらゆる歴史的、社会的知識によって開発された自由・平等は、全分子、全個人それ自身をまさに天才のように輝かせる。それとともに、さらにその中の最も優れた満天の星のような天才の精神を全て普遍的なものにして社会精神を偉大なものにし、さらに後代のより偉大な天才に基礎を与える。このより偉大な天才はより偉大にされた基礎の上に立って、より偉大にされた社会精神をより偉大な天才の手で特殊なものにして社会に放射する。より偉大にされた社会精神は、より偉大にされた精神を受け取り、これをさらに後代のより偉大な天才がより偉大な基礎とするため、普遍的なものにしていく。

人類はここまで来ると、「真理」によって本能を変化させるだろう。つまり、類人猿から分化した人類が社会的生殖作用によって脳髄及び神経系統を他の生物種族と対比できないほど進化させたように、「神類」に進化する類神人は、精神が驚くほど明晰な本能を獲得するに至るだろう。

8—7 美意識の進化

我々は従来多くの宗教が用いてきた「神」と言う言葉が意味する思想と区別するため、「神類」という文字を用いてきた。我々は、さらに人類がいかに「美」において進化するかを想像しよう。

全ての真、善、美が進化するものであることは言うまでもないので、一時代もしくは一地方において真とされたり、善とされたりするものを全ての時代と地方の真、善と推察することはできない。それと同じく、美についてもまた時代、地方によってそれぞれ異なることは言うまでもない。地方について言えば、ある野蛮人は頭が極端に円すい形であることを美とし、鼻は平たく、唇が厚くて入れ墨をしている者が最も恋い慕われる。白色の男女は、多くの黒色人種間では醜いとされ、配偶者を得られない者が多い。また、ダーウィ

¹⁰² 当時、北はちょうど二十三歳であった。

ンが大胆に形容したソマリアの美人¹⁰³の尻などは、その村落では美の絶頂とされる。中国人は、顔が平たくて額¹⁰⁴が丸く、眉が薄くて足の小さな女性¹⁰⁵を美しいとする。ヨーロッパでは胸が張っていて背が高く、顔の曲線がはっきりしている人を美しいとし、日本では尻が小さくて、髪が黒くて、卵のような目鼻立ちを美しいとするといったものである。また時代についてもそうである。社会が進化し、理想が進化するに従って美の理想を進化させ、遊女が墨でかいた眉、馬上の雄姿がその理想であったかと思えば、元禄の丹次郎¹⁰⁶が理想となり、さら胸につけられた勲章、演説家のひげなどが理想になり、小説家のやせた頬、角帽¹⁰⁷が理想とされ、えび茶袴を着た人が理想となることなどは、こうした移り変わりを示しているのだ。このようであるならば、進化的過程の一つにすぎない今日の美の理想で永遠に規律することができないことは言うまでもないのである。しかしながら、今日理想として仰がれ、それに到達しようという努力の対象になっている人物は、男子ならばキリスト、釈迦などで、女子ならばマリアなどであろう。それらはまさに真、善、美を体現した円満な容貌を持った顔であり、現世に求められないとして断念しながらも、憧れている美の頂上とされるものである。しかしながら、これは疑いもなく社会主義が実現してから二、三代後には、実現される美の理想であることは、先に説いた所から理解できよう。ただ残念ながら、人類が神と仰ぎ、仏と仰ぐ理想（実在する彼ら¹⁰⁸ではない）の美には排泄作用がないが、我々にはこの極めて醜いものがある。全ての理想は全て実現されるものである。この醜いものを維持したままでは、神の美に到達できないことは言うまでもない。けれど、我々はまた目的論の哲学と生物進化の事実によって、人類がこの排泄作用から脱却できると確信している。

8—8 器官の進化による排泄作用の退化

我々は依然として科学的基礎を保っている。生物進化論に従えば、全ての生物は生存進化の目的、理想のために、環境に応じてある器官を著しく進化させ、ある器官を著しく退化させ、今日のような無数の生物種族に分かれたのである。同じは虫類から分かれたものでも、鳥類では前足が驚くほど進化して羽、翼となった。獣に分かれて四つの足を持つようになったものでも水中に入ったものは、またさらにイルカ¹⁰⁹のように四つの足が半分尾に

103 原文では「ソマル美人」となっている。以前に「ツマル」というのが出てきたが、これを「ソマル (=ソマリア)」の誤りと見ることについては、前述を参照。

104 原文では「^{はなすじ}額」となっていて、[額力]と注記されている。確かに「鼻筋が丸い」というのはよく分からない表現である。しかし「額が丸い」というのもよく分からない表現である。「額」を「額」に変えても、それほど意味は明瞭にならない。ただ、「額」の方がまだ表現としてはわかる。よって「額」に直した。

105 清王朝の時代までは、女性は足を布で縛って大きくならないようにする「纏足」を行っていた。足の小さな女性というのは、纏足をした女性のことである。ちなみに、これには康熙帝が禁止令を出したのだが、効果がなかったほど浸透していたらしい。

106 「丹次郎」とは、為永春水の『春色梅暦』の主人公のこと。柔弱な好男子として描かれている。「元禄」というのは、着物のこと。元禄時代にできたことから、そう呼ばれている。

107 昔の大学生がつけていた帽子のことだろう。

108 「実在する彼ら」とは、実際に生きていたイエスや仏陀のことである。

109 原文では「海鱈」となっており、[豚カ]と注記されている「鱈」には「いわし」という訓読みしかないので、「海

退化したり、クジラのように完全に尾となったりしているのがこの例である。人類もまたその通りである。人類としての環境に適応して生存しようとする目的、進化するという理想のため、ある器官を著しく進化させ、ある器官を著しく退化させた。一切の工業的生産をするのに必要な前足の指を自由に運動させられるようにした（他のサル属は親指が特殊な働きをせず、それ以外の動物は単に歩行の用に供しているにすぎない）。脳髄及び神経系統などの比類のない発達（これが、人類がサル属と別種の階級に分類されなければならない理由である。）は、器官が進化した点である。全身の毛が抜け落ちたこと（他のサル属においては目の周囲と尻の赤い部分だけが脱落し、他の獣はむしろ毛深く進化した。）、耳を動かせないこと（他のサル属の多くは自由に動かせ、ウサギなどはむしろ進化して著しく大きくなっている。）、歯が小さくなって減少したこと（他のサル属は人類よりも大きく、多くの肉食獣は大いに進化している。）、尾が胎児だけに見られ、分娩後尾てい骨は体内に隠れて縮小していること（他のサル属は全て尾を持っていて、他の獣の多くは著しく進化している）などは、皆器官が退化した点である。もし旧式の唯物論を採用する、もしくは天地創造説を採用し、天地の初めから神の創造によって、もしくは何の理由もなく単に、牙があつたり、翼があつたり、直立していたり、はつていたり、尾があつたり、毛があつたりした者として存在していたと信じないならば、我々が目的論の哲学と生物進化論によって、人類が理想に従って全ての器官を進化させ、もしくは退化させているとの推論を否定する理由はない。そうではないのだ！ 人類が今日までにいかに消化器を退化させてきたかを見よ。口は著しく退化した。獣に共通する三つ口¹¹⁰なども、人類においては偶然の奇形児だけに見られるほどに退化した。歯も猛獣のような犬歯はもちろん、草食獣などの大きな臼歯もなく、数でも猿より退化¹¹¹し、文明人はさらに野蛮人よりも退化している。第三臼歯などは全く存在せず、文明人中の都会人は、田舎の人間と比べて上の門歯が早く脱落すると言うほど退化している。胃腸に至っても、菜食をするために純粋な肉食獣よりは比較的長いのだが、他の純粋な草食獣と比べて驚くほど退化しており、文明人は野蛮人の腹よりもさらに小さく退化している。あの盲腸¹¹²と言われる腸の上部に付いているものなどは、他の動物では消化作用をなしているが、人類に至って非常に退化した結果、病気のために切り取っても支障がないほど無用なものとなったという。この消化器が退化する事実は、ラマルクの用不用説のように、使用しない器官は次第に退化するというを示したものである。牛などの種族が三つの胃¹¹³と長い腸とを持っているのは、最も消化に困難な食物を食べるためである。鳥類の胃の壁が石のように堅く、胃の中に石を入れているのは、食物

鱷」では意味が通じない（イワシは魚類なのだから）。「海豚」とすれば、「イルカ」という意味になり、文章の流れにも反しない。よって、本文では修正して訳した。

¹¹⁰ 「三つ口」とは、上唇の中程が先天的に縦に避けているものを指す。

¹¹¹ 原文では「進化」となっているが、ここだけ「進化」というのは変である。また、野生のサルのほうが歯は発達しているであろう。よって、「退化」に直した。

¹¹² 原文では「虫様垂」となっている。「盲腸」を表す「虫垂」のことであろう。「虫垂」と言うか、「虫様突起」と言うかのどちらかで、「虫様垂」という呼び方はしない。後には「虫垂」と正しく使っているので、「虫様垂」はその二つを混同したものと思われる。

¹¹³ ただし、牛は胃を四つ持つ。

を砕かずに胃へ送るため、それを消化するために胃をすり鉢にし、石をすりこ木にしているのだ¹¹⁴。野蛮人の歯が文明人の歯よりも多くて、田舎人の門歯のほうが都会人よりもずっと健全であるというのは、食物を切り刻まずに口に放り込むためであり、口の中に包丁が必要だからである。野蛮人のほうが文明人よりも胃腸が長いというのは、外の世界で食物を消化する——煮る、焼くという——方法を知らないので、ふくらんだ腹の中に鍋、釜を入れているために大きいのだ。——人類は胃の中にすり鉢を置かないように、口の中から包丁を取り去ることができないのか。消化器のある部分を盲腸にしたように、鍋、釜の全てを取り出すことはできなのか。三つ口が人類にとって奇形であるように、肛門を持つことが奇形となるに至らせることはできないのか。我々は、科学的研究の名誉にかけて断言する。人類の今日までの消化器の退化が食物の進化によると言う全ての生物進化論者の推理が科学者の推理であるように、我々は科学者としての推理に従ってさらに人類の今後の進化は、同じく生物進化論によって人類の消化器は完全に退化するだろうと。そして食物の進化は、百年前のマルサスの朽ち果てた骨に手を合わせている経済学者でなければ、十分に期待できよう。今日の野蛮人と大差のない原始的食物も、近い将来に工業的に生産される時代となり、今日のように腹の中の鍋、釜、へその緒のついた小さな工場によって消化されている所を、蒸気と電気がある大消化器によって消化するようになれば、ラマルク説に従い、次第に消化器は退化し始めるだろう。そしてさらに遠い将来において、今日の化学者が実験室の窓から予言しているように、化学的調合によって食物を作る時代に入るならば、これは昔からの理想であつたいわゆる仙人になる薬である。人々はここで消化器の全てを退化させ（もしくは痕跡にとどまらせ）、三つ口、尾てい骨、全身の毛のように脱落させるだろう。この時は、台所の役割を果たしていた胃が大工場に移され、腸の水道が下水を流さなくなる時である。下水のカスで真玉のような手を汚している女中の肛門が、化学者をしもべとし、菊の花の紋の入った着物を着ている令夫人となる時である。排泄作用の必要がなくなる時なのだ。「美」の理想はこうして完成される。

8—9 どうして人は排泄を恥辱とするのか

理想とは、来るべき高い現実である。進化とは理想と現実の連続である。人類の歴史が始まってから最も高い理想として、つまり長い進化によって来るべき現実として描いている神が大便をしたり、おならをしたりすることを想像したことはあるだろうか。今日、我々は恋の理想に憧れ、「我が天女のような恋人よ」と呼ぶ。しかしながら、天女とは理想であって、恋人の現実是人知れずちりめんのふんどしを上げて、約一貫¹¹⁵のポテトを密かに落としていくものなのだ。ドイツ皇帝は自ら万民の理想であるとし、「朕は万能の神である」と称している。しかしながら、香木に匹敵する洋服の下からかますすかし屁は、その朕とい

114 原文は「鳥類の胃壁が石の如く堅く胃中に又石を有すと云ふは食物を粉碎せずして送る必要より胃中に^{すりばち}摺鉢を置くものなり。」である。しかし、このままでは言葉が足りないので、意味がわかりにくい。よって、意識を試みた。

115 「貫」は、尺貫法による単位。一貫でおよそ3.75キログラム。

う神の尊厳を表白するものではないだろう。いかなる侍医であっても、その秤¹¹⁶の上で渦を巻いている黄色い蛇の形をした物質を見て、「龍顔¹¹⁷の何と麗しいことか」と称えないだろう（昔御便器を掃除していた下女は言う、「將軍などと威張ってらっしゃいますが、この御垂れになったものを見て下さい。」と。この点、共同便所は連帯責任であるから、我々としては感謝しよう）。この著作がドイツ語で書かれたとするならば、ドイツ皇帝は尊厳を犯しているものとして日本政府に抗議を申し込むだろう。しかしながら、問題はどのようにおならをすることがカイゼル髭の尊厳と調和しないかということにある。ビュロー伯爵の名は大変「びゆるう」¹¹⁸というおならの音に似ているから、大臣責任論を拡充し、外交の失策と同じく内閣総理大臣におならの責任を負わせることができようが、問題はどのようにドイツ皇帝自身がその責任を負うことを回避して、神聖不可侵の権利を振るうかということにある。また、この著作が御婦人諸君の手にわたった時には、社会主義者にもあるまじき女権を踏みじめるものだと攻撃されよう。しかしながら問題は、女権論を主張する女学生らは、口に放り込む焼き芋を憚らずに横町で買い求める¹¹⁹にもかかわらず、えび茶袴とやらを上げてするポテトは少しもわからないかのような眺めで大通りを歩く理由にある。西洋の貴婦人が便所に入出入りすることは、親子、兄弟の間でも知られない秘密であるという。問題はどのように秘密にしなければならないかということにある。我々がこうした問題に筆を染めたのは、医学者がその指先で糞尿をかき混ぜるように、科学的研究として少しも恥ずかしいものではないからである。しかしながら、問題は人類がどのように糞尿を恥と考えるのかという現実にある。そして恥と感ずる程度は子供よりも成人のほうが強く、野蛮人よりも文明人のほうが強い感情の進化を経ている。我々は断言しよう。これは理想に対して現実が及んでいないこと——つまり、高い現実を望みながらも、未だ低い現実を脱却できないでいること——から来る感情であると。目的論の哲学と生物進化論は、この感情に説明を与える。人類は進化する生物である。理想に到達しようとする目的のために、常に現実を脱却しようと努力してやまない宇宙の現れなのである。もし宇宙に進化の目的がなく、人類に進化する生物でないとするならば、決して排泄作用をしない神もしくは天女を理想に描く理由はない。したがって、その理想と現実が著しくかけ離れていることを示すもの——大便をしたり、おならをしたりすること——を恥じる理由はない。恥の感情は、理想と対照的な現実への不満なのだ。我々は自己の道徳について無数の恥を感じ、自己の知識について無限の恥を感じる。つまり、我々が善でないことを恥とし、真を得ていないことを恥とするのは、道徳上の理想もしくは知識上の理想と比べ、はるかに及ばない不善、無知の現実を恥じるからなのである。我々がソクラテスを理想とする時、その哲学史の源泉

116 原文では「衝」の「行人偏」の所が「木偏」のような字になっている。このような字は、存在しない。『北一輝思想集成』は、「衝（はかり）」の誤りではないかと見ている。字から見て、そうであろう。

117 「龍顔」とは、天子の顔のこと。

118 ビュローは、ベルンハルト・フォン・ビュロー（Bernhard von Bülow）といい、当時のドイツ帝国の内閣総理大臣（一九〇〇—一九〇九の間、総理大臣を務めた）。「びゆるう」というのは、おならの音。ただ、この一文は、原文では意味が判然としないので、意識してある。

119 今も昔も女性が焼き芋を好むことに変わりはないと思うと、ほほえましいものである。

を作り上げる真理と毒杯の毒が全身に回るまでの靈魂の不死を説いていた善を我々と比較して、全くそれに至っていない現実を恥じる。我々がワシントン¹²⁰を思い、リンカーン¹²⁰を思う時、彼らの善を理想としながらも、それに到達していない現実を恥じ、マルクスを思い、ルソーを思う時、その真理を理想としながらも、それに到達していない現実を恥じる。これと同様のことなのだ。我々が理髪店の鏡に対してバイロン、ゲーテの美を思い、醜さを極めた己の現実を恥じ、鏡は、女子の多くにとっては自惚鏡¹²¹であるにもかかわらず（これは失礼！）、暗闇でほのかに見える美人に似た衣通姫¹²²のふっくらとした頬を思い、つゆもしたたるクレオパトラ¹²³の美しい瞳を思えば、そのあぐらをかいたように平たい鼻と^{ひきしがみ}廂髪¹²⁴にも覆われないおでこを恥じるだろう。——排泄作用を恥じることは、美の極致である神を理想としてそこに到達するために努力するまでに進化したことを示しているからなのである。理想がほとんど認められない、もしくは非常に低級な下等生物に至っては、真、善に対して現実の恥はないか、もしくはとても少ない。それと同じく、下等生物では美の理想もほとんど現実と異ならないため、糞尿について何の感覚もない。牛馬などは糞尿の中で寝起きし、自身に糞尿を付着させても平然としているのはその例である。あの牛馬より高い階級にいる犬、猫などになると、ある者は後足で埋めること¹²⁵を知り、サル属に至ってはさらに排泄物をととても忌避するのだが、それも到底理想の高尚な人類の比ではない。そして人類においても、子供から成人に、野蛮人から文明人に理想の階級を進めるようになって、だんだんと排泄物を忌避する感情を強めていく。子供などは原始的生活をしていた時代を反復しているので、排泄物が服の袖に付着しても何とも思わない。野蛮人は茅ぶきの家の前に山盛りに積んでいる。我々はこの生物進化論（したがって社会進化論）の上から、西洋の貴婦人が——えび茶式部¹²⁶と呼ばれる者のように——「あら、失礼。」と言っておならをしたり、「おならもでき物も、お構いなしに出てしまうものですから」と言ったりするほど公明正大でいることができないことは、はるかに進化している証拠だとわかる。社会進化の原則は、まず社会の一分子である皇帝によって実現されるということはしばしば前に説いた。我々は、この原則からすればドイツ皇帝は非常に賞賛できる例外であるにもかかわらず、なお自分を万民の仰ぐべき理想とするという無意味なことをしているが、まさにそのことによって、おならをビュロー伯爵になすり付ける理由があることを発見する¹²⁷。亭主が濁り酒を酌みながら、身を斜めにして勢いよくおならを放つようなこと

120 原文では「リンコルン」だが、英語読みに従う。

121 「自惚鏡」とは、容貌を実際よりもよく見せる鏡のこと。

122 允恭天皇の妃のこと。美しい肌の色が衣を通して照り輝いたとされる。つまり、美人のこと。

123 有名な古代エジプト（プトレマイオス朝）の女王。カエサル、アントニウスに近づき、女王としての権力の強化を行ったが失敗し、アントニウスの後を追って自殺した。

124 「廂髪」とは、前髪と左右の髪を前方につき出して結うもの。明治三十年中頃から女学生の間で流行したらしい。

125 猫は確かに土で埋めるらしい。しかし、これは外敵に居場所を探られないようにするためであって、恥だと感じるからではない。

126 「えび茶式部」とは、女学生のこと。明治三十年代にそう呼んでいたらしい。

127 要するに、「皇帝は個人の権威の絶対性を先駆けて実現したという賞賛できる点があるのだから、自らを万民の理想と改めて認識する必要はないが、そう考える理由はある」ということだろう。

は、連邦国家の首長がやってはいけないことであって、たとえその香りが宮廷中に漂うことがあったとしても、それが決してイタチのような御満足の大御心で行う思召しでないことは言うまでもない。要約すれば、我々人類が善に対しても、美に対しても数多くの恥を感じているのは、人類が進化する生物として持つ理想に到達しない現実を恥じるからである。そしてこの理想に到達していない現実を理想に到達させようとして努力し、理想を現実のものにする方法を発見した時、それを「進化」と言う。だから言うのだ。進化とは理想と現実の連続であると。今後善の理想を実現する方法は社会民主主義にある。今後真の理想を実現する方法は社会民主主義にある。今後美の理想を実現する方法もまた社会民主主義にある。自然法則に不用と誤謬はない。君主国時代も、貴族国時代も、民主国時代も、資本家制度の今日——私有財産制度の現代——、貧困、犯罪、貪欲さ、残忍さも、天下のあらゆるものは社会進化の理想に向けての努力である。あの遠い昔の二元論の思想を継承し、科学を罵倒し、物質文明を罵倒することなどは、食物の化学的調合によって神の美に関する宗教的要求の一面だけでも実現されることを理解しないためになされるのである。物質と精神は一つであって二つのものではない。天地のあらゆるものは皆一体である。

8—10 交接作用の廃止

人類はさらに交接作用をも廃止するだろう。交接作用が口にできない恥であることは排泄作用の恥よりも大きなものである。全ては目的論の哲学であり、全ては生物進化論である。あの恋愛と肉欲を二つに分けて、一方を神の光明の中に置き、他方を動物欲として捨てて顧みないことは——その解釈が二元論の域を出ないことはやむを得ないこととしても——、その要求である人類が進化する生物であることから発する理想である。——人類もここに至っては、ついに神の座に指先を触れたと言えようか。おお、目の前に見える神よ！不幸にして未だ今日の科学は我々に十分な基礎を供給していない。我々は科学的研究者の態度を忘れ、むやみに雲の間から見える神の御姿に手を差し伸べて、裾を引っ張ろうとするのではない。二元論の基礎をなしている有機物、無機物の区別が科学の進化によってなくなったとしても、また科学者のある者が無機物から有機物を作ったり、完全に生きている生物を作ったとしても、我々は直ちに神が肋骨の一つを取って人を作ったという神話が事実になる時が来たとは断言しない。——しかしながら、そのような時が来ることを待ち望む。生物学の範囲内に推論をとどめるが、生殖の方法がいかに異なっているかを見よ。両性が抱き合うという醜い方法は全ての生物の生殖行為ではない。魚類の多く（あるものを除いて）は、メスの卵の上にオスの精子を振りかけるといふ生殖方法をとるのである。人類はどうして異性の体内で精子を振りかけなければならないのか。人類はどうして九ヶ月間を母体で過ごさなければならないのか。今日では医学の進歩によって、ある産婦の利益のために七、八ヶ月で赤子が取り出されるというではないか。——人類はどうして女子を分娩の冒険に束縛し、九ヶ月間の膨大な時間を待たなければならないのか。妊婦のふくれ上がった腹そのものが美の理想に背き、男子の乱暴な行為を引き起こすのではないか。

分娩そのものが交接の恥を連想させ、無邪気な子供は母のへその緒から出たと教えられているのではないか。アメーバなどは単に分裂そのものによって無数に生殖する。人類はどうしてその肋骨の一つを取って精気を吹き込めないのか。無機物、有機物の区別がないことは、その肋骨の中に精気が存在することを教えないのか。化学者の実験室で作られた小さな生物は、どうして神が作ったという理想のように己の形に似た人として作られた生物であるという推論を否定するのか。龍が腹に寄りかかるという夢を見て沛公¹²⁸を産んだという身分の低い女、神の夢を見てキリストを身ごもった¹²⁹というマリアが姦通をしていたのだと直ちに断定することを、生物学がアブラムシがオスがなくても無数の生殖をしていることを発見した後に唱えるならば、額の上に角のある獣¹³⁰を想像することにも劣る。これはアブラムシと人類が単に進化の程度を異にすることから来る現象であって、本体に至ってはアブラムシの発生も人間の発生も同じ単細胞ではないか。全てのことは進化の過程である。アメーバの分裂が進化の一過程であるように、アブラムシの単為生殖も進化の一過程である。獣の季節によって決まった両性生殖が進化の一過程であるように、季節もなければ絶え間もない両性生殖をしている人類の両性生殖も進化の一過程である。人類が進化の過程である雌雄競争を必要としないほどに進化した時——何を憚ろうか。我々は生殖作用が滅亡すると断言しよう。

こうした時代になると、恋愛はわずかなものになり、生存競争の名も卑しいものになる。小我は大我となり、大我は無我となる。——生物進化論は偉大な釈迦の哲学・宗教に帰着した。——肉欲を超越した恋愛の要求はこうして実現され、世界全体はプラトンの愛¹³¹を実現するだろう。我々は理想の羽を収め、生物進化論の狭い社会を飛び去ってはいけない。我々は先に生殖作用とは理想を実現する方法であると述べ、恋愛が非常に高貴であることを説いた。しかしながら他方で、キリストの理想を実現することは広大で永遠に続く恋愛——その恋愛というのは、どれだけ多くの子孫を作るかわからないほどの恋愛——であることを説いた。独身の聖者はその理想を実現させることが多いので、数十人の子を作る凡人よりも多くの生殖をしており、みだらな享楽にふける若者よりも白髪になったトルストイ¹³²は全世界を寝室として生殖作用をしている。男女が抱き合う形での生殖は、原人時代までの現実を遺伝させるにとどまっているが、ヤショーダラー¹³³を捨てた釈迦の恋愛は、全人類の男女を添い寝させ、四千年間の理想とされるものを遺伝させた。肉体的遺伝と社会的

128 漢の初代皇帝である劉邦のこと。この話は、『史記』の高祖本紀に出ている。

129 有名な「受胎告知」の話。正確には、天使ガブリエルがマリアにキリストの受胎を告げたと聖書には書かれている。そのため、イエスは父ヨセフと血がつながっていない。

130 ユニコーンのことを指しているのだろう。

131 プラトンの愛とは、理想的な愛のこと。プラトンが理想主義者であったことに由来する。

132 有名なロシアの文豪。『戦争と平和』や『アンナ＝カレニナ』などの小説を書いたことで名高い。ちなみに、トルストイは小説中でベーターヴェンを批判したところ、当時まだ青年であったロマン＝ロランから抗議の手紙を受け取ったが、丁寧な返事を書いてロランに返したという逸話がある。

133 ゴータマ＝シッダールタ（仏陀）の妻。釈迦の従妹にあたる。後に釈迦の養母とともに出家した。

原文では、「ヤスタラ姫」となっているが、これは漢訳仏典（例えば、『法華経』勸持品第十二など）にある「耶輸陀羅」の読みによる。

遺伝の説明は、さらに強く言い換える必要がある。社会とは、空間を隔てた人類を分子とした大きな個体というよりは、空間が物質と精神で満たされ、つまり哲学的に言えば少しも空間のない密着した一つの個体である。だから、空間のない小さな個体の腹の中にいて遺伝を受ける生殖も、同じく空間のない大きな個体の腹の中にいて遺伝を受ける教育も、ともに生殖であり、教育なのである。社会的遺伝の教育も大きな腹の中でなされる生殖であり、肉体的遺伝の生殖も小さな腹の中でなされる教育である。我々は母の腹の中を出て、キリストの腹の中に入り、釈迦の腹の中に入った。そうではない！ 依然として社会の腹の中にいる。そしてキリストも、釈迦も、社会全体も我々の腹の中にいる。ここまで来れば、どこに一夫一婦論があろうか。恋愛神聖論があろうか。大我の愛であり、無我の愛であり、絶対的な愛である。

「人類」は滅亡し、「神類」の世は来る。

8—11 進化の帰結

人類の滅亡と言うと、それに恐怖する者がいるだろうか。ここで言う人類の滅亡とは、「地球の冷却によって熱を失う時、人類は滅亡だろう」といった現実離れした悲観的な推論をするものではない。神類が地球に蔓延することによって滅亡するだろうという大変喜ばしいことなのだ。もし人類の祖先である類人猿が永遠に滅亡せずに我々を産んでいたならば、我々人類は今日もなお半人半猿の生物とならなければならなかったのではないか。また、もしさらに遠い人類の祖先であるは虫類が永遠に滅亡せずに我々を産んでいたならば、我々人類は今日もなお半鳥半獣という驚くべき形態の生物とならなければならなかったのではないか。この愚かな知識しか持たない人類、この卑しむべき道徳しか持たない人類、この醜い容貌しか持たない人類、排泄作用と交接作用をしている人類が一日も早く滅亡し、「神類」の世が来ることは胸の高鳴るような喜ばしいことでなければ何であるのか。そして全ての生物は永久に死なないものである。我々がは虫類の子孫であり、類人猿の子孫であるように、「神類」は我々人類が死なず、命が継続して進化した子孫なのである。これが社会主義の哲学、宗教である——つまり、従来の哲学、宗教のように、現在の小さな個体の死後を他の世界に求め、理想は自己の胸の内にとどまり、実現することができないと言うようなことは、多神教の哲学、祖先教の宗教と同じで、古い哲学、宗教として捨てられるべき個人主義の哲学、宗教と言うべきなのだ。宇宙は一体で進化し、我々は永久に不死不滅となって進化する。死後の幸福は他の世界にはない。理想はことごとく実現される。天国とか、極楽とかいうのは、人類の進化した一生物種族「神類」の地球のことである。

まさにこれこそが、社会主義の哲学、宗教なのである。我々は後の偉大な哲学者、聖人が出現するまで、これを我々の科学的宗教とし、心を安らかにして、身を天命に任せているのである。しかしながら必ず知るべきことは、理想は次第に実現されるものであり、進化は定まった程度を越えないものだということである。無我、絶対の愛は神類の世界で行われるものであって、人類の現実で行われるものではない。人類は今日は虫類ではなく、

類人猿でもないように、決して全てにおいて神類なのではない。それなのに、今日進化の過程にある人類に向かって神類の世においてだけ実現される無我、絶対の愛を説くとはどういうことか！ これは、今日まで進化してきた人類に向かって、「は虫類のように、類人猿のように生活せよ」と言うのと同じ道理を外したことを要求するものにすぎないのだ。——だから、社会民主主義の哲学、宗教はキリスト教を排し、仏教を付加¹³⁴するが、ただ社会民主主義の哲学、宗教として立つだろう。今日の人類は衣食がなければ生存することができない——だから、社会主義を主張する。恋愛がなければ不死であることができない——だから、民主主義を主張する。まさに、社会民主主義は「人類」と「神類」の進化をつなぐ唯一の大鉄橋なのだ。人類が排泄作用と交接作用という恥ずべき現実を脱却できないうちは、種族単位での食物競争と個人単位の雌雄競争という嫌な現実の生存競争を脱却できない。進化の法則という自然法則には一つも誤りがない。小我を発展させる競争がなければ大我に至ることができないし、無我の愛、絶対の愛に至ることはなおさらできない。キリストは絶対的な愛を説いた。しかしながら一夫一婦を命じた。これは、夫婦の外にある愛の排斥を意味しており、絶対的な愛ではない。これは小我の愛である。釈迦は無我の愛を説いた。しかしながらその股の肉を割いて狼に与えた。これは狼の小我を承認したものであり、絶対的な愛ではない。我々はドイツ皇帝に対して言ったように、釈迦が大便をすること、キリストがおならをすることは語らない。しかしながら、こうした排泄作用を余儀なくされた彼らは、神や仏の美を持たない。彼らは美、善、真において、我々と同じく人類社会の分子として人類の遠い将来に到達する「神類」の世を理想とただけなのだとと言える。神類の理想は、彼ら二、三の人類に限らず、全人類の理想とする所である。ただ、理想と現実の道において、社会民主主義には社会民主主義の道がある。社会民主主義の両眼は空を仰いで神の世を認める。けれどその足は大きく踏み出して歩きはするが、地球上を離れない。社会民主主義の天国に昇る門はアーメンではない。極楽に至る道は南無阿彌陀仏ではない。一つには——階級闘争にあり、個性の発展にあり、能力に合わせて啓発することにあり、自由な恋愛にあり、そして科学にある。

（我々は、これで全世界の要求している科学的宗教の導きさえも発見したと言うほど粗暴でないことは言うまでもない。私は「人類」と「神類」をつなぐ鉄橋を架設しようとして努めている一工夫として、少々ハンマーの手を止めて河の向こう岸を指さし、社会民主主義者が働く目的を語ったにすぎない。我々は、報酬のない労働、困難な鉄橋工事であっても、この河の向こう岸の光明を見れば少しの苦痛さえもない宗教的信念によって歓喜にたえないことを告白すればよい。あの絶対的な愛を説くというキリスト教徒、無我の愛を説くという仏教徒、そして殊に近年に至って自ら預言者¹³⁵と称し、救世主と掲げてそれらを

134 原文には「社会民主主義の哲学宗教は基督教を排し仏教を付けて…」となっていて、[ママ]と注記されている。文字通り解釈すると、キリスト教は排するが、仏教は排しないということになる。しかしそうすると、釈迦が無我の愛を説いたとする記述との整合性が疑問となる。無我の愛、絶対の愛は神類に進化してからでないと実現できないと言っているのだから、無我の愛を説く仏教も排するの必要に迫られるはずである。北が議論を誤ったとしか思えない。

135 原文では「予言者」になっている。予言者でも、預言者でも意味は通じると思われるが、キリスト教などを上げている流れからすると、「預言者」のほうが適切であろう。よって本文ではそちらを採用した。

宣伝している者に至っては、我々は断じて味方しない。彼らは「人類」に向かって直ちに「神類」となることを要求し、そしてむしろそれに到達しようと努力している社会民主主義の架橋工事を嘲笑し、罵っている。我々は彼らの熱情から出る真心を尊敬する。もちろん、それは人類に向かって「類人猿」のように、「爬虫類」のように生活せよと言わないだけの無害な発狂者という条件を満たす限りにおいてであるが。あの『社会主義評論』の筆を捨て、無我の愛というものを説いている河上肇氏などは、この点において最も惜しむべきであると言える。

8—12 総括

以上から帰結は次のようになる。

今の生物進化論は全てその力を極めて排撃した天地創造説を先入観とし、生物進化の事実を解釈しているものである。つまり、人類は天地の初めから個々として存在していたという個人主義の思想によって個体の観念を作り、一つのものからアメーバのように分裂した大きな個体であるという社会単位の生存競争を理解していない。したがって、個人単位の生存競争である雌雄競争と個人単位の食物競争の生物進化論における地位を定めることができないのである。人類を天地が終わる時まで存在するものであるかのように考え、生物種族の階級において人類の占める地位を理解していない。したがって、理想が実現されて人類より上級の生物が人類に代わって地球に存在するだろうという今後の進化を推論することができない。そして今後の人類の進化によって天国が地球に来るという科学的宗教に到達しないのは、これも等しく天地創造説の宗教を先入観にしているためである。

まさに、社会哲学は人類社会という一生物種族の生存進化の理法と理想を論じるものであるから、当然生物進化論の巻末の一章において社会進化論として論じられなければならない。そして宇宙目的論の哲学と生物進化論の科学はここで初めて合致し、相互に帰納と演繹を行って科学的宗教となる。ただ、我々人類は相対的な存在の生物種族であるので、人類によって眺められた宇宙、考えられた目的は、宇宙の大きさから見れば相対的な理想であるにすぎない。人類として生存している間は「神類」が絶対的な理想である。

だから、我々は生物進化論に「類神人」という一語がなければ結論がないと主張する。

その次にあたる章は、もちろん「神類」が筆を執るべきである。

(第三篇——生物進化論と社会哲学 終わり)